

# 求道

第拾四卷  
第貳號

四 月 號

■ 無抵抗主義の誤謬

■ 衆禍の波轉ず

■ 無碍の一心と他利利他の深義

■ 濁世動亂と親鸞聖人

大正七年四月十五日發行(毎月一四十五日發行)

## 無抵抗主義の誤謬

○トルストイの無抵抗主義といふことは、人生問題として深き意義のものである、特に西洋の如き衝突争闘を以て文明進歩の根本であるかの如く考へつゝある思想界に於ては、空谷の梵音として、此福音に向て一世の渴仰を集めたも尤のことである。

○泰西の文明は戦の結果である、政治でも國際でも、宗教に至るまでも皆戦の産物である、歐洲今日の動亂を來たしたも、思想上の潮流としては當然かくなるべき筈にして、決して怪むに足らぬ次第である。

○獨逸が帝國主義軍國主義を標榜して其野心を逞くし、遠大の計畫を立て、其鐵脚の下に列國を蹂躪し、其命令の下に世界を統一せんとするが如きは、泰西思想の必然の結果として生み出したる産物である。

○獨逸が現時歐洲に於て多事なるが爲めに、東洋に其

銳鋒を向けることが出來ぬのであるが、歐洲に於て多少にても手を抜くことが出來る様になつたならば、其時こそは恐くは堤を決するの勢を以て東洋に向ふであらう。少くともカイゼルの眼中には、嘗て其物せる諷刺畫にある如く、東洋は黒雲中に毒蛇の火を吐く様に考へられて居るに違ひない。

○現時交戦國として何等の餘地もなければ、軍國主義帝國主義の渴仰者が、動もすれば獨逸に對して感服して、將來親み得べきもの、様に夢想するものあらば、夫こそ龍の領の珠を取らんとするものである、必ずや禍あるであらう、袁世凱の死によりて僥倖にも對支問題には變化を來したであらうが、對獨問題はたとひ一カイゼルの死によりても永久に變化せぬであらう。

○此の如く獨逸の軍國主義が世界の禍たることは、今

更喋々するの要なきも、併我國の思想界に對しては此無要の言を繰返さねばならぬ要がないとも言へぬ、併現時の勢としては火を以て火を救ふ能はざる如く、軍國主義を制するに軍國主義を以てすべからざることは言を待たぬことである。

○然らば英國首相の宣せるが如く、直に此度の戦争は軍國主義に對する民本主義の戦と斷言すべきか、特に亞米利加大統領の宣言は、我國の立脚地として一々承認すべきものであるか、容易に斷言は出來ぬであらう、我國としては我國の立場がある、聯合國であるから、一々他國の意見に従はねばならぬといふものでもあるまい、全体此度の戦争は武器の戦争たると共に思想の戦争である、此際に於て我國の如き、あまり沈黙するは誤解を招く本であらう、是政府當局者のみならず國民全体たしかに其責を免ることは出來ぬ、極言すれば形勢觀望ばかりして居つて、堂々と打出して行くべき根本思想を撰むことが出來ぬのではないか。

○併英米は先づ第二として、此際吾人の尤も注意を拂はねばならぬのは露國の革命である、獨逸の軍國主義に對して、聯合國に極端なる裏切をなしたるものは露國の政變である、而して其露國の思想なるものは如何であるか、不幸にして我々は詳細なる研究をなさぬゆゑに、其思想の系統を十分に跡付けることは出來ぬ、然れども事實としては獨逸の軍國主義に對して交戦中に軍備を撤回して何等の抵抗をなさず、城下の誓をなしたることは最も驚くべき事件である。

○現時露國の思想を以て必しもトルストイの無抵抗主義の結果とは見做さぬ、然れども、レニンの言なりとて人の傳ふる所を聞くに、若したとひトルストイが存在して居つても、獨逸に對して是已上の事は出來ぬであらうと言ふたといふことである、如何にも露國人としては言ひそななことである。

○レニン必しも無抵抗主義にあらざることは、此頃頻に浦鹽の陸戦隊上陸に抗議するのでも明らかである、

實力に於て無抵抗であるだけ、言論は過激なる抵抗である、併少くとも獨逸の軍國主義に對して、止むを得ずとは言ひながら、事實無抵抗的屈從である、是に於て我等は無抵抗主義なる教訓には、人間として到底免るべからざる誤謬あることを自覺せねばならぬ。

○トルストイの無抵抗主義は非戰論である、無裁判論である、財産私有否定論である、併是れ一種の理想論である、空想論である、トルストイ自身に於てすら遂に其家庭に止るに堪へずして遁世隱退の路に於て逝かれたるは、其理想は遂に人生に實現すべからざることを證明するものである。

○極言せば無抵抗主義を以て抵抗することが既に一種の抵抗である、故に人に對して無抵抗なれといふことは、人として爲し得べからざることを爲せといふものである、罪惡鬭争の人生に對して、直に神たれ佛たれと教ふるものである、動もすれば人生に實現し得べからざるものを擧まんとするの空想に陥るものである。

肇めて清明の天地を實現し得べきである、閻浮八萬四千城、不動干戈致太平とは、確に抵抗主義の世界に平和を來す源泉たる、盡十方無碍光の力を歌ふたるものである。

○勿論不動干戈とか兵戈無用といふことは、非戰論や無抵抗主義を意味するものではない、寧ろ我等抵抗の干戈が無碍光のために頭の下つた態度である、我等煩惱の兵戈が攝取心光の下に融和されたる態度である、我等煩惱抵抗の人間が此無碍の大道の下に仰望して進むべき態度である。

○不斷煩惱得涅槃、是れ抵抗鬭争の人生に處する我等の唯一の標幟である、此西洋文明の最高潮の現象たる世界の大動亂に對して、決して無抵抗的空想を以て、空拳を以て、應酬し得べきではない。此大抵抗を折伏するには其執拗に相當すべき大抵抗の奮起を避くることは出來ぬのである、然れども抵抗已上に卓越せる絶對無碍の大道の存在するありて、最終には世界の抵抗

○英にせよ、米にせよ、軍國主義に對して民本主義の戰なりと宣するは、是明かに抵抗主義戰爭主義の泰西文明の本領をあらはして居るものである、獨の軍國主義の抵抗とは方針を異にするとは言へ、抵抗主義戰爭主義に至りては同一と言はねばならぬ、而して露國政變も思想言論に於ては、少なからぬ抵抗主義に陥れるを見れば、事實無抵抗主義といふことは實際上あり得べからざることである。

○吾人は一面に西洋文明の戰爭衝突の弊を指摘すると共に、亦無抵抗主義の誤謬を評論する所以のものは、必ずや此二者に卓越したる立場を見出し得べき信仰の存するからである。

○人間は無抵抗ではない抵抗である、有碍である、然れども其有碍抵抗のみでは決して最終の平和を實現することは出來ぬ、如何なる有碍も、如何なる抵抗も、之を融和すべき無碍の大道がある、盡十方無碍光の力なるものがある、一切の有碍は此無碍光の光澤を蒙りて、

を攝受する大理想の存在を高く仰かねばならぬ、此大道の存在ありてこそ大抵抗に對して自信を以て霹靂一聲大折伏をなすべきである、其代りには攝受すべきときは如何なる犠牲を拂ふても、亦如何なる誘惑にも陥らずして、徹頭徹尾無碍大道の實現に努力せねばならぬ、蓋し是れ我國が東洋文明の精髓を把持して、世界動亂の舞臺に貢獻すべき天職である。

○若し我々にして眞に軍國主義帝國主義蠶食主義の野心なくんば、決して人に誤解さるゝことを恐るゝに當らない、如何に民本主義、共和主義、社會主義を高唱するものありとも、我にして確固たる立場あらば何ぞ之に追隨するの要あらん、須らく我國民は一大信念に執持して、世界平和の開闢者たる使命を果すべき也。

(四、十一)

# 衆禍の波轉ず

爾れば大悲の願船に乗じて、光明の廣海に浮びぬれば、至徳の風靜に衆禍の波轉ず。即ち無明の闇を破し、速に無量光明土に到て、大般涅槃を證し、普賢の徳に遵ふなり。知る可し。

## 親鸞聖人『行卷』

先日來一週日の間旅行して參つた。今回參つたは昨年來お話しした(木陸前號所載)私の親友、西洋に同行した友人、岡山なる池山榮吉君の夫人が癌に罹られて、一旦は非常な失望であつたが、豫てより心懸けの篤い方であつたが、それがもと著しき信仰に這入れ、存命中に一度遇ひ度いとあつたのをお訪れ仕度いと思ひ立つたのと、今一つは昨年末御存知の如く九州桐野炭坑が爆發して、三百六十餘人の人達が一時に惨死した。その炭坑の持主なる貝島家とは従前より知合ひの間柄であり、殊に同炭坑へは態々陛下より待從を差し向けられたる程にて、是非一度訪れて不幸なる人達を慰め度い。この心持ちで居つた處へ、恰もこの七

日がその四十九日に當つた、即ち參つてお話しして來たことである。又同じく九州麻生家は信友有田廣君の弟君の家である。先般弟君が上京せられて、歸らるゝと聞無しに、之れは過失からであるが、同じく嶺山事務所に置いてあつた火藥が爆發して、事務員十名程の人が傷つき仆れた。この方はこの八日が二七日に當つた。即ちこれ支けて參つて昨夜歸京して來た次第である。何れの場合も實に斷腸の至り、慘鼻の極。却つて慰藉に參つた私の方が種々なる感化教訓を受け、又信仰上の謂はれを知らしめて頂き、切に人生の當てにならざることを感じさせて貰つて來たことであつた。又同時にこの人生として、この慈悲を頂かせて貰ふ外なきことを彌々知らせて貰つたことであつた。即ちそれをば聞いて頂かうと

思ふのである。

## 二

何より言はんか、言ふ可きことは澤山ある中に、第一只今冒頭に掲げた『行卷』の言葉は、昨夏備後の鞆町にて池山君と遇つた時、つまらぬ私の筆なれども之を書いて差上げた處が、それをほ掛け物として掛けて置いて下されることである。處が今度參つた處池山君が言はれるには、『この掛け物を書いて貰つた頃には、初めの「大悲の願船に乗じて光明の廣海に浮びぬれば」の方は分つたが、「衆禍の波轉ず」の方は、讀んで居つたけれども、これ程迄に著しきことゝは思はなかつたが、今度はこれ程に意味深いことかと事實を以て知らして貰うた』との話であつた。マア今日この『行卷』の言葉を話すとすれば、順序として初めから言ふ可きであるけれども、直に池山君のことから申すと、實は同君と私との間柄は極めて親懇の間柄にて、今いふ備後の鞆町にて一昨年相會し、昨年も私が參ると、そこへ出向いて來て下されたことであつた。處がこは今更言ふてもないが、一昨年そこにて遇つた時、從來の君とはコロリと變は

つて居らるゝに驚いたことであつた。それを茲に言ふは長くなるけれども、元來この池山君なる人は人格の高尙な人で、又早くより社會問題の大切なるに着目し、彼の地に於ても専らその方面を研究し、歸朝後も自ら商人となつて烟草屋を經營し、實際的にその問題を研究しやうとせられたる人である。當時その店に在つて世話せられた方が今真宗大學を卒業して鞆町に在り、その方よりの話で私は同地に赴くことになつたのであつた。處で一昨年同地で遇つて見ると、意外なる哉。同君の口より南無阿彌陀佛々々と、少時の間も念佛の聲止む時無し。第一船へ迎えに出て、呉れた君がその御様子なるを見て、私は着くなり喫驚して『君何うした』ウン、マア』といふやうのことにて、それはその少し以前であつたらしいのである。内容は言はれぬから分らぬも、元來真地目な、非常な親孝行な方で、何か心中に深く托屈せらるゝ處あり、『こんな淺ましい心が起るやうては可かぬ、こんな思ひが出るやうては可かぬ』と深くそのことを氣にして居られた處に、豫ねて聞いて居られた『歎異抄』二章の

親懇におきてはたゞ念佛して彌陀に助けられまら

すべしと、よき人の仰ほせをかうふりて信ずるほかに別の仔細なきなり。

之を思ひ出し、成る程茲であつたと深く氣づかれた處あつたもの、如く、それより口を衝いて南無阿彌陀佛々々と、即ちそのことが初めてあつたらしい御様子であるのである。こはその時遇つた時、私が演説するとなつた時、『君も仕給へ』。『イヤ僕は聞かして貰ふ方だ』と仕やうとせられぬのを無理に勸めて、話さるゝのを聞く

と、『廻心』といふ題にて『歎異鈔』十六章の

廻心といふことはたゞひとたびあるべし。云云。

これを話されて、今の自分がこんな淺ましい心がありては可かぬと彌々行き詰つた時、たゞ念佛の教えに氣がついたといふお話であつたのであつた。斯く同君の著しく喜んで居らるゝことは今更言ふても無いが、その様を見る者、唯人で無いと噂してるといふ程である。昨年のおきも『歎異鈔』の獨逸譯を思ひ立たれて、既にもう出来上り、獨逸人も見て感心して居るといふ有様である。

三

けた南無阿彌陀佛になる。そうではなくその仕方の無いを佛兼ねて知召し、その仕方の無さを助けんと南無阿彌陀佛でましますのである。

こは頗る簡單なる申し方になつたのであるけれども、第一『大悲の願船』なる言葉が讀みやうによつては、喩えた言葉の如くにあるのである。けれども、私共が如何なる罪の重いのも易すく浮ばれるから船なのである。唯仕方が無いからと向うへ突きつけたのなれば、船に乗つたる味ひは出て來ぬではないか。私共の仕やうの無いのを佛兼ねて知召し、その者を遣る瀬無く待ち居るぞとのことが、船である點なのである。

こはいつともいふ喩なれども、我々亂暴者である小供が、如何なる着物も着せ無い。その着れぬ汝が可哀相故、その汝に着させやうとの、親が長々骨折りの一枚の手織の着物の南無阿彌陀佛でましますのである。すると『私の亂暴者が如何なる着物も着れぬのを哀はれみ思召し、その者に着させやうとの親が長々御眞實の手織りの着物、有難う』の外なくな

即ちその如くに『大悲の願船に乗じて、光明の廣海に浮びぬれば』——直ぐ之でいふと、私共人生彌々となる」と如何とも仕て見やうが無い。その仕て見やうなきを哀はれみ

『唯念佛して彌陀に助けられ參らすべし』との仰せが、即ち大悲の願船にてましますのである。この苦惱の人生、人力では仕て見やうなきを哀はれみ給ひて、その者を飽く迄も見捨て給はざる御眞實が、即ち南無阿彌陀佛の一つといふこと。茲で唯念佛の

唯なることが、私共の仕て見やうなきを哀はれませ給ふ大悲の御眞實の有りなりが、唯念佛ばかりの仰せと、斯くなつて來るのである。

そこで青年諸君に申すと、青年諸君は『自分のやうなことでは仕やうが無い』と、人生、自分の仕やうのないことをのみ言はるのであるけれども、その仕やうのなきを哀はれみ給ひて、茲に唯念佛のお慈悲がましますので無いか。又信者の人は『仕やうが無いから南無阿彌陀佛』と、恰も仕方がないからすがりつく如くに言はるのであるけれども、それなら仕方無し南無阿彌陀佛、向うへ突きつ

つて來る。如何なる物も喰べられぬ病氣の小供が可哀相故、その者を養ふ爲めの親心の粥ぞと言はるれば、『この如何なる物も喰べられぬ私の爲めに、態々こさえて下された哀はれみか、有難い』の外なくなつて來る。それが間違ふのは聞き方が悪いと、『我々何物ももう着られぬ、仕やうがないからこの親の手織り』と、これになると安心がされぬのである。『もう自分は何も喰べられぬ、仕やうがないからこの粥』といふのなら、それでは此方からの決め込みである故、態々自分のためにこしらえて下された親の御心が頂けたにならぬ。『人生もう仕やうが無いから、唯この南無阿彌陀佛ばかり』と、これなら此方の心は唯もう淋しいばかり、これで本當に安心が出來ますか。然うてはなく、『その仕やうの無いのが心淋しからう、その如何なる着物も着れぬとなつたが可哀相ぢや、故にその爲め親がこしらえた手織りである。可哀相ぢやが汝は他の如何なる着物も着られぬのぢや』とある、こゝ肝腎の點であることを申度いのである。

四

順序立て、いふと長くなる故、ゴツチャに聞いて頂

くことにする。今我々病氣であるとする、誰とて死に度く無い、生き度いばかりである。今我々他の立派な着物着度いと思ふのも之と同じである。我々長生き仕度い、健康であり度い、らく仕度い。斯く此方から考へるとなると、私共の思ふ處は皆な是である。けれども『汝それは生き度いてあらう、無理ないけれども人生なれば、イヤでも矢張り死ぬるでないか。』——現に先きいふ桐野鑛山、三百六十餘人の人が一爆發の下に土中に埋つて、今に遺骸が出て來ぬといふは、誰とて注意に注意をなし、人間の頭で考へらるゝ限り、人力では、この已上盡くせぬといふ程の設備は充分せられて居るのである。それにそらういふことが起つて來るは、これは私共の『斯うあり度い、あゝあり度い』それは此方の思はくを言うて居るのに過ぎぬのだといふ。思はくの上よりは、我々何處迄も死に度く無い、長生き仕度い。けれども矢張り死ななくてはならぬ。然るに今親より言うて下さるは、『汝、外の物が喰べらるゝ位なら、粥をこしらへせぬのである。如何せん他の如何なる物も喰べられぬ汝。成る程人生常住の美はしき

着物を着、この世いつ迄も榮え度いてあらうが、それは可哀相だが、出來ぬのだ。その出來ざる、如何なる着物も着れざる、何物も喰べられざる汝を見ると、その仕やうの無いのが可哀相でならぬ、故にその着れ無い、喰べられ無い汝の爲め、どうかしてこしらへ上げた親が一枚の手織り、粥である。この無常の人生に、永劫ならぬ汝の身の上が可哀相でならぬ故、その汝の仕て見やうの無い有様に飽く迄も同情し、その汝に何うかして——と思つた我が親心の塊がこの南無阿彌陀佛ぞ』と。それ故浄土といふもこの思召一つより報ひ現はれた浄土であれば、それを『この世は當てにならぬ、極樂でも願ふより仕方が無い』と、斯く言ひて居るのは、『仕方が無いから親の手織りを着やう』これになつて、それでは飽く迄もお見捨て無く不思議の御眞實より報ひあらはれた南無阿彌陀佛の御眞意が頂けたにならぬ。これは今度など桐野鑛山あたりへ參つて見ると、その氣の毒なる有様は眞に言語に絶した有様。幾百人の人々が親に別れ夫を失ひ、仕て見やう無いと言つてもこれ程の仕て見やうの無い有様は無い。そこへ參つて

お話を聞いて頂く。その仕やうの無い時に聞かれるこの温い會堂で首を傾げて聞かれるとは別である。勿論鑛山を経營して居られる方の人達も同やうで、如何にして自分の鑛山の爲め犠牲となつた不幸なる人達を慰めんか、如何にして哀はれませんか。中には佛前の打敷をこしらへる人もあれば、三ツ具足を作る人もあり、現に私が參るとなれば、私の土産まで向うてこしらえて渡されるといふ有様、色々に苦心して手を盡くされる。けれども人力でいかぬこと故、何れ丈け骨折られても何とも仕て見やうが無い。その人間の力で仕て見やう無いのを哀はれみて、その仕て見やう無いのを遣る瀬無く言うて下さる大慈大悲であるのである。故にそこを聞かぬと、唯言葉で『仕方が無いから南無阿彌陀佛』仕方が無いから佛のお慈悲」と、之では仕方無しに突きやつて居る丈けになる。他力は私共の、この彌々仕やうの無いのを兼ねて哀はれみ思召し、斯く無常の、現にこの如きの世の中である。故に『それに苦むのは無理無い、察するぞ、同情するぞ』と、飽く迄も遣る瀬無く言うて下さる眞實が本願のお心である。故に之を

聞くと如何な人生、仕方の無き者も、『この仕方の無いのをそれ程に哀れみ思召す御眞實であつたか、恐れ入りました』と、即ちそれが本願の船に乗つたのである。人生哀別離苦の仕て見やう無い悲しい人間が、その悲しいのをそれ程迄に哀はれみ思召す御眞實一つで初めて得心がゆき、満足させて貰へるとなつて來るのである。處が皆様が之を聞かれても分別せんならぬは、仕方が無いと唯考えてそらう言うて居られるのだからである。本當に仕方が無いとなつた時には、考へる餘地などあるもので無い。これは話が横道に這入つたのであるけれども、今いふ私の友人が『唯念佛して云々』の一語でお慈悲を知らせて貰ふたといふ、唯念佛の味ひを申さして貰ふたのである。

五

齋處で今度參つたはその御夫人の方、矢張り一昨年御主人と御一緒に鞆町に來てお聞き下されてあつたのであつた。處が此間お目にかゝつて言はれるには、何うも前から腹押えると堅いものがあつた。氣持ち悪く思ふたけれども、若し癪だなど、言はれると思つて、見て貰は無いで居る。處がふとした機で病院へ行き診

て貰ひ、「こゝに何か堅いものがあります、何てせう」すると醫者が心配さうな顔して「イヤそれが問題なのだ」と、言はるゝなり逆上して、殆ど卒倒するかと思ふた程であつたといふ。即ちそれが

先きよりいふのがこゝなのである。處がそれ程失望落膽せんならぬ、その仕やうの無いのを哀はれみ思召し、豫てより遣る瀬無く待ち受け給ふ大慈大悲でましますのである。即ち『あゝ、茲であつたか』と氣づかれるなり、一時にサツと胸がらくにつて、

『あゝもう斯うなつて彼是れ思ふたて仕やうが無い。

こんなだから佛が置いて下されたのか』と。直に思はれたことは、『これが主人であつたら仕やうが無いに、自分であつてマアよかつた』と、これが私共の殊勝な心で思はれたので無い。實にふと利益問題なのである。主人だと月給とる人が無くなるから生活の道が杜絶して、子供を見て貰ふ事が出來まいに、自分であつてよかつたといふのである。斯くして家に歸りこの事を主人に話し、親に話し、子供に告げられた。元來池山君なる人が至つて性情の恬淡なる人で、夫人に常に戯を言ふ。戯にいつも『豈と

程なのである。

六

それで今度如きも私が參つたとなつたもの故、信仰上の友達の人々が聞き度いといふので、十人廿人どかゝやつて來て響應を受けて信仰を聞かれるといふ有様、まるで病氣見舞ひに來たのか何しに來たのか分らぬ程の有様であつたのであつた。してその中を本人平氣でシャン／＼やつて居られる。仕舞ひには私他の人達を誡めた程であつた。それは斯く病人がお慈悲に安んじて平氣であられるのを皆なが『不思議なことぢや、／＼』と、それは皆なが信仰上の喜びの積りで言うて居らるゝのであるけれども、『そんな呑氣な喜びと、今癌で逝く人の喜ぶとは意味が違ふでないか。皆なもちつとは夫人の身の上になつて、眞に仕て見やうなきを哀れみ思召す御眞實を頂かして貰はな可かぬて無いか』と。何さま喜びが著しいもの故追ひ／＼人が聞き傳へて、近頃では高等學校の教員、學生その外有縁の人々が、毎月一回位會して話し合はれるとやうになつて居る模様である。要するに總てが是れ『大悲の願船に乘じて……衆禍の波轉ず』の有様。併しこゝは異れ／＼

夫人は新しいのがよい。歸つて貰ひませうか。常にこんなこと言うて居られたのだそうであるが、この時夫人が歸つて來られて『今度はお望み通り新しくなりませう』——これを言はれると主人もグツと詰まつて仕まはれ、『今までお前に苦勞ばかりかけて濟まなかつた』子供は子供で『今までお母さんの言ふことさかないで濟まなんだ、何うかこらえてくれ』周圍に寄り集つて互にかばい合つて泣き叫ぶといふ有様で、一時は非常な悲歎であつたそうである。が、それがこの何う思うて見ても仕やうの無い、『この仕やうの無いのを兼ねてより遣る瀬無く哀はれみ思召すお慈悲でましましたか有難い。』これで御夫人は御夫人、主人は主人で安心さして頂かれ、その仕やうのない中から一日々々を安らかに過さして貰うておいてなるのである。即ち衆禍の波轉ずなることは、斯ういふ有難いことであつたかと、初て分らして貰つたとのお話であつたのであつた。若しお慈悲がましますずは今頃は何うなつて居らるるか分らぬに、私參つて見ると癌の夫人が卒先してテントコ働でお出になる。その上この度如き生前銅婚式を擧げて心の限り名残りを惜まうと言うて居られる

も申して置かなならぬは、信仰は『仕方が無いから佛に突きつける』仕方が無い故佛にすがりつく——若し之をそういふこと、取られると非常な間違ひになるのである。それで安心がされるなら事無いのであるけれども、それで安心はならぬ、寧ろ佛よりしてこの仕方無く、斯く人生當てにならぬ、この當てにならぬを哀はれみ思召して、『唯念佛して彌陀に助けられ參らせよ』との仰せてあるのである。唯念佛の唯なることが何處かといふに、斯く人生のそらごとたはごと、當てにならぬ、この當てにならぬを他くまで遣る瀬なく言ふて下さる御眞實、その思召が唯なのである。話が何もかも一緒になるけれども、殊に先きいふ桐野鑛山如きにする時は、當てにならぬと言うてもこれ程當てにならぬは無い。第一本人自身にする時は、今の今迄何げなく働いて居た處に、思ひがけなく大爆發。幾百人の生命が一時に土中に埋まつて仕まつて、これ程當てにならぬ事は無い。私は着くなり『執持鈔』の御文を讀み上げたことであつたのである。『執持鈔』の御文に、

根機つたなしとして卑下すべからず、佛に下根をすく

ふ大悲あり。行業をろそかなりとて、うたがふべからず、經に乃至一念の文あり。佛語に虛妄なし、本願にあやまりあらんや。名號を正定業となづくることは、佛の不思議力をたもてば往生の業まさしくさだまるゆへなり。もし彌陀の名願力を稱念すとも、往生なを不定ならば、正定業とはなづくべからず。我すてに本願の名號を持念す。往生の業すてに成辨することよろこぶべし。かるがゆへに臨終にふたゝび名號をとなへずとも、往生をとぐべきこと勿論なり。

茲に淨土眞宗の價値はある。『臨終に再び名號を稱へずとも往生に間違ひは無し。』これ程著しいことは無いのである。

——一切衆生のありさま、過去の業因まら／＼なり。また死の縁無量なり。やまひにをかされて死するものもあり。つるぎにあたりて死するものもあり。水におぼれて死するものもあり。火に焼けて死するものあり。乃至寢死するものもあり。酒狂して死するたぐひあり。これみな先世の業因なり、さらにのがるべきにあらず。かくのごとき死期にいたりて、一

旦の妄念をおこさんばかは、いかてか凡夫のならんや。——

彌々大爆發となつた時、我々『慈悲が難有い』でもあるまいし、『佛にすがりつく』でもあるまいし、即ち『一旦の妄念を起さん外は、いかて凡夫のならんや、……願心もあらんや』である。

## 七

話が混雜するけれども、昨年の夏季求道會の時來られた向坊君の話がこゝだつたのである。彼の人は撫順の爆發に出會はれた。而も初めの爆發の時、五六百の人が亡くなつたのであるけれども、その時には日本人は案外に少かつた。何でも今度は餘程研究されたそうであるが、併し矢張り斯く炭鑛が火になつた時には、坑道の入口を蓋して、火を消すより仕方が無いそうである。撫順の時も全坑眞赤になる程燃え上つたそうであるが、それを蓋して消し、久しく經つて消えたと思ふ頃、救命器を身につけて決死隊を組織して搜索に這入つて行かれた。這入ると間無しに二度目の爆發が來て、向坊君はその時仆れられたのである。大聲出して

仆れられたので、幸ひその聲を聞きつけて、皆なて外部へ引張り出した。全身眞黒になつて居る故、誰であるか分り兼ねたも、大聲を出したのと、且つ兵隊のシャツを着て居られたので、漸く君であることが分つた程であつたそうである。直ぐ酸素吸入器をかけた、——この時酸素吸入が二人分しかなかつたのを、一人分かけてまだ戻ら無い。猶半人分かけた時、南無阿彌陀佛々々と、息を吹き反して來られたのだそうである。假死の状態に在つて苦しんで居た人が氣がついて呼吸が戻ると南無阿彌陀佛々々々。恐らく頭が南無阿彌陀佛になつて居たものであらう。換言すると南無阿彌陀佛の世界に居られたからであらうと思はして貰ふのである。そういふ具合に氣がついて來られたが、實に不思議とより言ひやうが無い。處が茲で言はれたのだからお聞きの人もあるが、その爆發の時の事を話されて、思はず知らず『失敗つた』と大聲出して仆れたとのお話であつた。私はこれを聞いた時妙な氣持がした。これ程喜んで居る人が、南無阿彌陀佛ならなれども、失敗つたと言つて仆れたと聞き、何だか踏み違えた如き氣持が仕た。けれども、考えて見

ると、

『失敗つた』と、この時之しか出ぬ管なのである。『殘念だ』と爾か言ふより外ないのである。或は爆發だからと思はれるかも知れぬが、我々病氣で仆れる時も之に違はぬのである。病人はデリ々々ゆくの故大聲は出さぬ。よく世間には『心臟麻痺でらくに參られた』など言ふ。ナニ、現に養老附近に或人一旦死んで蘇り來り、私に聞き度いといふので、往つて話した事があつた。その時本人いふには、『本人に仕て見ると決してらくなものではない』といふ。現に此間も今の向坊君のことを貝島家て話すと、その失敗つたとの一言出たのが餘程腹が据つて居るからだといふ。餘程えらくなげねばその場合、失敗つた、殘念だなどの言葉が出るものでないといふ。處が斯く失敗つた、殘念だと叫んで死ななければならぬその殘念さを

『嘸殘念だらう。その汝を何處迄も捨てぬのだぞ、何處迄も見てやるぞ』——この慈悲が聞えるもの故心中に『有難い！』と、それで死ぬ故、死ぬ時心の中が南無阿彌陀佛、從つて目が醒めた時も南無阿彌陀佛と、即ち之が『一切衆生のありさま、過去の業因まら／＼



なり、また死の縁無量なり……かくの如きの死期にいたりて、一旦の妄念をおこさんほかは、いかてか凡夫のならひ、名號稱念の正念もおこり、往生淨土の願心もあらんや」とお知らせ下さる處であるのである。即ち私共生きて居る限りは、『あゝ仕度、斯う仕度』の妄念ばかり、彌々となつた時佛にすがり思ひなど出て来る私ではないのである。爾るにその私の仕て見やうないのを遣る瀬無く哀れ思召すお心の塊の南無阿彌陀佛、故に『唯念佛して彌陀に助けられ参らすべし』との御教化、それを

平生の時頂かして貰うて居るから、その者がやるせなき御眞實の故に報士得生と、斯ういふことになつて來るのである。これは私向坊君の話を聞いた時に、如何にも之れはよい話。若し死にしまに南無阿彌陀佛と、その方はまことに結構であるも、  
 目が開いた時『失敗つた！』と言はねばならぬやうであつてはたまつたもので無い。向坊君のは娑婆へ目をあかれたのであるから、娑婆で南無阿彌陀佛となつたのであるけれども、これが未來へ開かれたのなら、極樂淨土へ南無阿彌陀佛と、

に申したのである。『もうあなただけ聞けばよいて無いか。死にしまに話して居るといふに、外の者なんか寄せつけなくてよい』と。全體彌々生命畢らうとする苦しい境遇を、尋常人が想像で言うて居るのであるから、甚だ氣樂なことになつて居る。それで今の話を聞いて夫人が非常に喜ばれて、言はれたには『實は此間からひどく腹が痛むと、折々念佛仕やうにも出來ぬことがある。設え念佛が出來ぬか、お見捨て無き慈悲が必ず参らせて下さることは頂いて居るけれども、今の有様では、彌々の時どんな有様で引きとらせて貰へるか。皆なの人から大往生遂げるものゝ如く思はれて居て、自分は構はぬけれども、入らぬことで人に誤解を興へはせぬかと、氣になつて居た。處が今の話で彌々の時、『失敗つた』の一言しかないのが本當とうけ玉はつて、初めて安心した。私設え何のやうな有様で畢らうと、設え『失敗つた』と亡くならうと、皆なが案じることは無いことが分つて、大變らくになつた』と。今の撫順の話が意外なる處に響いて池山夫人が非常に安心して、下さられたのであつたのである。

正覺淨華中より化生さして頂かれたこと、思はして貰ふのである。

## 八

話が滅茶苦茶になるのであるけれども、私今度はこの話を既に池山君の處から申さして貰うて居つたのであつた。處が既に充分安心して居らるゝのであるけれどもこの話が  
 夫人に非常に喜んで貰はれた。それは全體癩の病人が斯くの如き有様で喜ばるゝのであるから、寄りつく程の者が皆んなが『不思議ぢや〜。只事で無い〜。』仕まひには『イヤ誰某の知合ひの人は病中非常に喜んで居られたが、安らかな臨終でいまして。イヤ誰某の往生は斯く〜の有様でありましたよ』など、まるで嘸し立てゝ居るやうな氣樂な話になつて居るのである。私は仕まひには腹立てゝ、そいふ所謂信者の人達にひどく灸するて來た。一方は一二月後には生命畢らうとする重病入である。即ち私  
 生き葬ひに來て居る。追悼會を兼ねて來て居るのである。それに片方の人達は、『らくにさせて貰つて有難い』など、全然話になつて居らぬ。私、最後には夫人

この懸念が信後には時によると出て來るのである。現に池山夫人如き非常な安心で、餘りに元氣よくやつて居らるゝもの故、私『貴方身體が悪いのにそんなに働いて居ていかぬでないか』と申すと池山君が『イヤあれを樂みに仕て居るのだから、あゝさせとかなくても可かぬのだ』と。——それ程にあられるのであるけれども、彌々ひどく痛み出すと『あゝ斯う』の思ひしか無い。又小供の事、あとの事思はれると、結局の處は『失敗つた』の一言しかあるまいと思はして貰ふのである。その一言しかない、その處を遣る無く、その者に廣大の御眞實を寄せて下さる處のお慈悲——

これは先きいふ桐野炭鑛にする時は、三百六十餘人の人々が一爆發の下に土中に埋つて、今に遺骸が上がつてこぬといふ有様『失敗つた』とより言ひやうが無い。又遺族の人達にする時は、一度び斯くあつて再び親の顔、子の顔、夫の顔見るに由ないといふ有様『失敗つた』とより外に言ひやうが無い。その『失敗つた』とより外言ひやうのない人生の有様なることを御覽下されて、その仕やうの無いのを哀はれみ、その者に飽く迄御見捨てもなく大慈大悲でまします、とのことが、

佛の御眞實なることであるのである。故に『かくの如きの死期にいたりて……往生浄土の願心もあらんや』而して次に

——平生のとき、期するところの約束もしたかは、往生ののぞみむなしかるべし。しかれば平生の一念によりて往生の得否はさだまれるものなり。——即ち平生の時が大切である。今言ふ向坊君如き、平生の時あれ程喜んで居られたけれども、彌々となつた時は『失敗つた！』併しこれを言うたから助らぬ、言はぬから助かると、それでは慈悲なることが意義あることにならぬ。その『失敗つた！』とより外に言葉の出やうなき者が、平生の時その仕方ないのを何處迄も御見捨ての無い御眞實なることを聞かして貰ふて居る故、『平生の一念にて往生の得否は定れるものなり。』平生の時私共がこの當てにならぬ人生、この當てにならぬを何處迄も見捨ての無い御眞實なることを頂かして貰うて居る。——先さういふ如く爆發の所で話すのは、この温い會堂で話すとは違ふと言ふと、茲暖爐の燃えて居る安樂な會堂内は大に確かなのか。といふに然うて無い。矢張り仕方が無いのである。爾

が先きになつて居るからである。或は外のはよくないけれども、安心仕度の、信仰得度いはいと思はるゝかも知れぬけれども、それになると矢張り死に度く無い、病氣快くなり度いと同じで、悪く無いかも知れぬけれども、矢張り同じ此方の思惑である。皆なが信仰得度いゝに苦みつゝも、事實に於ては得られぬて困つて居るとなつて居るのである。又我々實際人生上の問題に於ても『あゝ仕度の、斯う仕度の』の事柄が澤山ある。何れも皆な死に度くないと同じ此方の思惑である。そこになると一人々々の思惑が皆な別々故、——それは皆さんにする時は、死なねばならぬの問題に一人の異論者は無けれども、理屈言ふと無常の世、いつ何時知れぬのであるから、今茲で臨終を取り詰めてはならぬ。何程ならぬと言つても、ならなくともなれぬのは、理屈に於ては死ぬと思ふて居つても、事實に於ては死ぬと思つて居らぬからであるから、寧ろ今皆様が事實に於て思つて居られる、その夫れゝの問題でこゝをば聞いて頂き度いと思ふのである。

甚だ例が適切すぎるのであるけれども、今言ふ皆様

るに今この平生の時この仕方の無いのを哀み給ふも慈悲であるとのことを申すのであるから、茲は御自身々々々の上に聞いて頂かなくてはならぬのである。

### 九

そこで皆様に上來申述る處で氣を附けて頂き度いのは如何に避けやうと思つても死は避けられぬ、病氣は何程仕度く無いと思つても、時至れば仕やうが無いとのことを申したのである。今皆さんの持つて居らるゝ人生問題は何うかといふに、皆なが各自に『あゝ仕度い、こゝ仕度い。』をうして私共人間の力では望み得べからざることを『あゝ仕て斯う仕て』と、皆なが之に骨折つて居るのである。而してそれが今の爆發とか不治の難症とか、さういふ大事になると仕て見やうの無いことが分り易いのであるけれども、平日のになるとそれがあゝ斯うと思ふ如く出来るやうに思つて居るのであるから、をかしまぬのである。此間も山口より或る方態々聴きに見えたが、残念ながら安心して歸られたやうに思へぬ。それが何であるかといふに、『安心し度いゝ』の思ひ

が、信仰得度いゝの思ひで、而して現に得られ無くて行き悩んでおいてになるのである。又私共人生上に在りて斯ういふ風の生活仕度い、あゝいふ風の生活仕度い。それは限りなく思ふが、それも出来て居ぬのである。設し又出来たに似た處が、それが何程の値打ちあることか。さういふ風に私共の『かう仕度い、あゝ仕度い』が、現に仕て見やうなき有様になつて居るのである。それが私の口では唯言葉丈けになつて仕まふけれども、今爆發、癌となつた時には、今更何とも仕て見やうが無いが、私共の事皆な之れになつて居るのである。それを皆んなが思惑通りに成れると思つて居るのが間違つて居るのである。それ程に現に仕方の無い人生、自分の力では如何とも仕て見やうが無い。そこになると修養せんとするも出来ぬのであるし、境遇を脱れやうとするも、脱がれ得ぬのである。爆發は避けられぬし、病氣は直らぬのであるから、何うにも仕やうが無い。彌々仕やうがないとなると、私共残念ながら血の涙流しても、

落ちねばならぬには落ちねばならぬし、死なねばならぬには死なねばならぬ。その仕方の無い私共の有様であることを遣る瀬無く思召され、其の者を何處迄も救ふとの大慈大悲でましますことを能く聞いて頂かねばならぬのである。他の物が喰べられぬのが哀はれ故、その者に腹ふくらせてやり度いばかりに作つて下された親のお粥の南無阿彌陀佛である。汝他が喰べられる程なら何を苦しみて粥を作らうや。他の物が着れる程なら親は手織りの苦勞は仕給はぬのである。それを私共人生思ふやうになる氣で居るは、まだ好きな物勝手に喰べられる積りて居るものである。

一〇

マア私今度九州では、その仕やうの無い所へ参つたのであるから話の仕やうが無い。その仕て見やうの無いのが哀はれとの慈悲とより申して見やうが無い。已をえず、『涅槃經』四句の偈でお話して來たのである。四句の偈は有名なる

諸行は無常なり。是れ生滅の法なり。生滅滅し已りて、寂滅を樂と爲す。

本願とはこのお見捨ての無いお力でましますのである。

そこで『涅槃經偈』では初めの二句、『諸行は無常なり、是れ生滅の法なり』——これは『いろは歌』では、色は香へど散りぬるを、我が世誰ぞ常ならむ、とある處で、即ちこの世は當てにならぬとのことを示されたものである。その處に『涅槃經』で有名なる雪山童子の譬がある。童子が雪山に於て眞實安心の道を求めて未だ聞くことが出来ぬ。その處に雪山の景色が非常に美はしく説かれてある。けれども童子にする時は、四季の眺めを樂んで、肝腎の要法を遺失しては何もならぬ。何處迄も何うかして眞實の道を聞き度い。その代はりそれを得る爲めには、自分の一切を捨て、差支無い。命を差出して厭はぬと決心したといふのである。これは私共人生成功の樂みを捨て、歡樂の欲望を捨て、眞實の安心を得やうとなつた處である。即ちそういふ人生欲望の方面では行き詰まり、彌々眞實救濟の門戸を求めねば仕方のなくなつた處。處へ諸天がその様を見て、先づ羅刹の姿を現じて、童子に今の偈の初め二句を聞かせたといふのである。童子は初

彼の『いろは歌』はこの偈を作られたものであるといふ。これを申した意味は、私共唯人生が當てにならぬ仕やうが無い、と言つてはばかりでは未だ毫末も佛のお慈悲を聞いたものにならぬ。それは谷底に墜ち込んで、唯藻掻いて居る有様に過ぎぬのである。私共今この仕やうの無い谷底に陥入つて藻掻いて居るのを、上より見て下された人ありて、『汝如何にも仕て見やうがないだらう、苦しいだらう。汝の墜ち込んで上れなくなつて居るのが如何にも不感である。それを不感と見た上は、如何やうにしても我は汝を引き上げずには措かぬのだぞ。設し汝の引き込む力が強くして自分の方が墜さるか、自分の力が汝を引き上げてしまふか、我のある限り、何處々迄も汝を救はずには措かぬのだぞ』と、彌々この慈悲を聞かされて、『この仕やうのなき者を斯く迄に思召し下さるのか』と、これでその者が引き上げて頂く處が肝腎なのである。唯仕て見やうが無い、當てにならぬと谷底に墜ち込んで居るばかりで、『その者を飽く迄も捨てぬのだぞ』との、この廣大お力の加はつて下さる處を頂かな何にもならぬ。即ち佛の

めて之を耳にして眞に跳り上りて喜んだ。即ち人生無常、この世は當てにならぬとのことを知らされたのである。處が當てにならぬはよい、即ち癩、爆發である。現に此間も華原様がお子さんを亡くなされて、それが御縁で與様が非常に喜ばれた。即ち當てに仕て居つた子供もこの通り死んで逝く。當てにならぬは眼前の事實である。故に當てにならぬ迄は分るも、その先きが來ぬことには仕やうがない。即ち童子が初め二句分つたに就け、彌々あと二句聞かねば措け無くなつたが茲なのである。仕方の無い迄は分るも、その仕方の無いのがこの先き何う救はれるか、救はれぬか。實は

茲が大問題なる點である。そこで求めなさるお方に注意する。皆さんが『信仰頂き度い』とて苦心さるゝのであるが、その頂き度い、と求めらるゝ方角で決して安心が得られることは無いのである。私共信仰頂く方では、いつ迄たつても望み通り頂けるといふことは無い。又人生種々なる理想も出るのであるが、それも結局駄目なのである。寧ろ最後は頂

けたらと思つた信仰も、『最早や自分ばかりは頂けぬ』  
で仕やうが無い』——この『信仰が得られぬで仕やうが  
無い』と『子供が亡くなつて仕やうが無い』と何う違ふ  
か。信仰の方は人生に望みを絶ちて求めるのであるか  
ら、他の人生的欲望とは違ふやうにあるけれども、矢張  
り『頂けぬで仕やうが無いから何うかなり度い』即ち  
『亡くなつて仕やうが無いから生き反へらせ度い』と同  
じであつて、矢張り人生に花咲く方を眺めて居ること  
になる。こゝは餘程氣を附けなくてはならぬ點である。

一

處て一寸横にゆく、今の桐野炭坑に参ると、地方の僧  
侶の方が五六人集つて、頻に勤めをなし、慰藉して居ら  
るのである。其お話に安心して居る方は會社から仕  
て呉る、厚意を善く受けるが、仕て居ぬ方は却つて悪  
感を持ちて會社のすることを押し付けのやうに思ひ、  
正當に取らぬとの話であつた。聞く處によると、遺族  
が氣の毒と會社から見舞金を持ちて行く。一人『イヤ私  
は暫しか居りませぬ故お金は頂きませぬ。その代はり  
何うか元通りに仕て貰へまいか』と言つたとの話であ  
つた。昨年東京附近風水害の砌不幸なる罹災者の爲め

それでは仕方がないから、あ、と説いて欲しいとなつた  
のである。

すると羅刹は『我は飢えたるものである、腹がへつ  
てあと續けることが出来ぬ。それ程聞き度いなら汝の  
生命を我に與へよ』と。童子は『爾らば吾が身體を汝に  
與へやう。』羅刹言ふには『汝身體を我に與へる程なら  
ば、何の爲めに法を聞くのか』と。——こゝ私共  
『信仰を得て活動しやう』安心して生活仕やう言ふて  
るのであるけれども、それなら  
身體を與へて仕まつては可かぬで無いか。こゝ『信仰  
を得て偉くならう、理想的生活を實現しやう、喜んで  
日暮仕やう』それ言うてる人は羅刹の一言に参つて仕  
まふ處である。すると童子は『汝言うたで無いか。こ  
の身は當てにならぬのだと。今この身は仕やうが無い  
から、即ち身を捨て、道を求めやうと思ふのである』  
と。即ち先きよりいふ仕て見やうが無いといふとこで  
ある。それは我々癪にはなり度くなけれども避けるこ  
とが出来ぬの故、何とも仕て見やうが無い。今私茲で  
講話して居る、地方に居らるゝ方が聞き度いと何程思  
はれても仕やうが無い。人生の事皆な是れてある。そ

淺草本願寺に於て追悼會が營まれた。その席にても私  
遺族の人々に對し、『設え  
千僧萬僧の供養を受けた處が、皆んなの心持は充分で  
あるまい。その氣の毒なる、慰藉されぬ心持を思ふ時  
は、何と慰めてよいか物が言へぬ。併し茲に氣を付け  
ぬならぬことは、その如何なる方法でも慰まれぬ、仕  
て見やうない心持ち。今佛の慈悲なることは、その仕  
て見やうのない心持を汲み取つて、その仕方なさを何  
處迄も察するぞとの仰せてある』ことを申したのであ  
つた。即ち  
頂き處は茲なのである。『察するぞ』とか『遣る瀬無く』  
とかは、私共先方が慈悲と言はれ、親切と言はるれば、  
『難有い』となり度い、『嬉しい』となり度い。けれども  
如何せん、何程廣大の同情で言はれても、到底そんな  
ことで慰藉されぬその私の心持ち、その然うならぬは  
無理無い、最もぞと、  
そこを察したのだぞ、同情したのだぞとの仰せてまし  
ますのである。こゝになると私共難有いになり度い、嬉  
しいになり度い。けれども、如何せんそうなれぬ、仕  
やうが無い。即ち童子は仕やうが無い迄は分つたも、

れを  
その仕やうが無いことに皆なが茲氣を附けぬから頂け  
ぬ。こは何も仕やうが無いと、諦めよといふのでは無  
い。寧ろ佛より言ふと『その諦められぬ、仕やうの無い。  
そこを見てやるぞ』それは此方は自分の思はくの仕て  
見やうに目を着けて居るの故、仕やうがないと此方の  
方からは思ひ切れぬ。爆發、子が亡くなつた、親がな  
くなつた、思ひ切れぬ。癪だ、死なぬならぬ、思ひ切  
れぬ。故に『その思ひ切れぬ、仕やうの無い、それが  
可哀相故、そこを見てやつたぞ、察したぞ、故にその  
汝を我は何處迄も捨てぬのだぞ』との御眞實てまし  
すのである。

二

そこで先きの『執持鈔』文には『根機つたなしとて  
卑下すべからず、佛に下根を救ふ大悲あり』——そう  
いふ思ひ切りのつかぬ根機の愚な者を救ふとの大慈大  
悲でましますのである。その根機の拙きを遣る瀬なく  
のためお慈悲の故に  
無明長夜の燈炬なり、 智眼くらしとかなしむな、  
生死大海の船筏なり、 罪障おもしとげかざれ。

『行業あるそかなりとて疑ふ可らず』——池山君が南無阿彌陀佛々々と念佛せらるゝと聞くと、自分はそのやうに出来ぬ、斯くもろそかではいかぬと疑ふてはならぬ『經に乃至一念の文あり。』——一生の間稱へる念佛より、未だ聲に現はさねども念佛申さんと思ひ立つ心の起つた時がはや攝取不捨の光明中との仰せ故心配に及ばぬ。『佛語に虚妄なし、本願あにやまりあらんや』即ちそれが本願の御旨趣でないか、これを頂けとである。處が『佛語に虚妄なし、本願あに誤らんや』

——第一  
佛が有りや否や、本願ありや否や、それからが怪しいでないかと。それには係はらぬ。イヤそれを言うてもよい。そういふ小理屈言うて仕て見やうの無い、その者を何處迄も遣る瀬無く哀はれみ下さるとのことが本願とのことであり、佛語でましますのである。故にその何處迄もの御親切でましますとの事を聞くと、その者が初めて自分の仕て見やうなかつたことに氣がついて『佛語に虚妄なし、本願豈誤あらんや。』『名號を正定業となづくることは、佛の不思議力をたもてば往生の業まさしくさだまるゆへなり。』

えたのであるから、何うか受けて呉れ』之を聞くと』さ  
てはさういふお心の南無阿彌陀佛であつたか、難有い』  
と、之が『名號は佛の不思議力をたもてば』である。  
即ち、して見るとその親心と手紙、粥、  
南無阿彌陀佛と親心と別々にあるので無い。この仕て  
見やう無さをそれ程迄に見捨て無きお心の不思議力  
の名號である。故に『……不思議力をたもてば、往生  
の業正しく定る故なり。』茲親の心を頂くと念佛が喰べ  
られると、二つに言ふとよきも、實は  
親心を頂いたが念佛を喰べたのである。『さういふお心  
の名號であつたか、南無阿彌陀佛々々と』と、名號を  
喰べた時が、親心の頂けた時である。『もし彌陀の名願  
力を稱念するとも、往生なを不定ならば正定業とはな  
づくべからず』——親の手織りの名號を身に着ながら  
も、猶ほ『出来ることなら外の綺麗なもの着たい』そ  
れては手織り成就の御眞實が頂けたのでないから不定  
である。さういふ名號では正定業とは名けぬ。『我すて  
に本願の名號を持念す、往生の業すてに成辨すること  
をよろこぶべし』——爾にその不可思議御眞實の名  
號を頂いて、この仕て見やう無き者が腹一杯充分とな

こゝが難有い處である。『正信偽』には  
本願の名號は正定業なり。

『名號を正定業と名することは、佛の  
不思議力をたもてば』——この『たもてば』が有難い。  
即ち先きの喩の着物は着るものである。けれども『自  
分は他のよい着物が着れぬ、仕方が無いから親の手織  
りを着やう』ては態々自分の爲に親の仕上げて下され  
た親の志が頂けたにならぬ。即ち『もう仕やうがない  
から南無阿彌陀佛、仕やうがないから信仰』と、この  
意味ならそれは  
まだ南無阿彌陀佛だけは自分で出来る積りで居る、仕  
方無しに突き付けてある、本物で無い。處が『汝何を  
言ふて居る、汝まだ喰べられたり、着られたりする位  
なら、汝は病人ではないか。汝は可哀相だが病人  
だぞ、癪だぞ。もう何物も喰べられぬのぢや、着られ  
ぬのぢや、その喰べられぬ、着られぬ汝を見ると可哀  
相で、その汝に着せ度い、喰べさせ度いばかりに親が  
態々こしらへた手織りであるぞ、粥であるぞ』と、こ  
の態々こしらへて下された親のお心。『これは他の如何  
なる物でも仕やうのない汝の爲に長々骨折してこしら

り、南無阿彌陀佛々々と。即ち南無阿彌陀佛の名號  
は、これ程仕て見やう無き御同やうを、それ程迄にお  
見捨て無き大慈大悲のお心の塊が本願の名號であるこ  
とを申したのである。

二三

抑々私斯くいふは九州、池山君方の實況を繰返して、  
皆様に彌々、お慈悲の一道であることを聞いて頂き度  
いからである。故に皆様にも人生『あー斯う』の理想  
は様々あらるゝことならん。けれども結局それが思ふ  
やうゆかぬは今の『涅槃經』偈の如し。死到ると何程  
生き度いと思つても仕方が無いと同じである。如何に  
も私共思ふやうにならぬ有様は今の『執持鈔』——『死  
の縁無量なり云々』の御教化、それが唯言葉で無しに  
實地である。今羅刹に命呉れと言はれて何とも仕て見  
やう無きが、私共現在の有様。この時何うするのか。  
仕方が無いから命惜むのでもあるまいし、さらば他力  
は命捨てぬならぬでは可笑しいでないか、ナニ惡るび  
れず覺悟せよとのことも無いのである。兎角從來  
信者の人の言には信仰の結果と信仰の前とを混同する  
弊がある。『イヤ何時知れぬのが業報だから諦らめぬ

ば」と、之を直ぐに言ふから可かぬ。それは結果は夫れであるも、初めからそれになれる位なら、信仰は入らぬ。その然う出られるは慈悲に腹ふくらせて貰うたからの話、それを信前に言ふは無理である。それは慈悲を知らせて貰ふが故にそうなれる。又能く中には大に諦めた積りで、『諦めました』を言ふ人がある。ナニ諦められて居やせぬ。寧ろ『諦めました』といふてのが嘘である。反對に『イヤ諦められまい、愚痴か止むまい、思ひ切れぬだらう、永劫迷ふだらう』それ程に私共が諦められぬ、そこを汲みとつて佛より遣る瀬無く言ふて下さる慈悲である。併し諦められぬと死ぬるとは別である。能く近角の話は『諦められぬ』であるから結構と言はるゝも、その諦められぬが死なねばならぬのであるから仕やうが無い。故にその死なねばならぬ、諦められぬその仕て見やうないのを哀はれと見て下されて、先きの『執持鈔』文『かくの如きの死期にいたりて……往生淨土の願心もあらんや。』——茲になると何人も一旦の妄念、『残念！』失敗つた』とより外無い。その外無きことを、此方がまだ起さぬ先きから佛の方が見て下されて、その煩

不具、手無し、足無し、僣憊、心のねぢけた、種々なる不具の御同やうであるから、親はその不具と生れついたのを可哀相に思召し、その不具の爲めに不具の着る手織りの着物をこしらえ、病人の喰べられる粥を作りて、その不具、病人を飽く迄も捨てぬとの大慈大悲で、名のりかけ下されたが佛の御本願のことなのである。

## 一四

「そこでこれが、先きいふ唯南無阿彌陀佛の一つのことなのである。坐禪、戒行、有らゆる六度萬行の堅い食事ではもういかぬ、この仕やうの無い重病人、この者に之を喰べさせてと御成就下されたる親心の塊の南無阿彌陀佛である。故に唯念佛の一つである。全體こゝ此方の仕て見やう無いのと、その者に斯く飽く迄遣る瀬なく言はるゝ慈悲と、連絡がつかぬ。若し私の話一般と違ふ處がありとせば、唯このひと所である。よく人が『近角の話はあれは悟である。今の池山夫人の如くにバツと安心が来る。併し眞の眞宗の安心はあのやうなものでない。』

憍妄念、生死無常の私に、何處迄も遣る瀬無く加えて下さる御まことである。その仕やうの無い者に喰べさせんと慈悲の粥、纏はせんと親心の手織り、その者を浮ばせんと大悲の願船、その者が不便で捨て、置けぬとの御眞實の涙と、かういふ事になるのである。茲になると先般或方が喜ばれた不具の小供の話、七歳で僣憊になり、大きくなつて店頭で遊んで居た。道通る學校歸りの女の子が二三人、『アレ不具が居ます』と指差して笑ふて通る。その子はワツと泣き聲あげて、『アレ皆んながあんなこといふ』と、母親にすがりついた。それを女の子等は振り返つて見て不具々々といふて通つて行つた。母親が悲み泣く子を抱きかゝえて言ふには、『さういふお前が肩身狭い思ひせんならぬ身體だから、お母さんがこの通り可哀相に思つて可愛がつて上げてゐるので無いか。さういふ笑はれんならぬ身故、親はこの通り可愛がる』といふたとの話である。人生無常、癌、爆發、皆なよくなれぬ不具である。信仰頂き度い、彼の人は頂いたのに』といふも、人は頂いたに自分が頂けぬから不具である。さういふ

南無阿彌陀佛々々と泣きながら喜ぶのだ』と、さういふことを言ふ人がある。それは今の遣る瀬なき御眞實と、此方の泣かんならん仕て見やう無さと繋れる、連絡の處が無いとそれが来る。現に此間も今の池山君の處に寄つて来た信者の一人『御信心といふものは、頂く迄は六かしいも、頂いて仕まへば之れ程易いことは無い』と頻に言うて居る。或はさうかも知れぬも、その言うて居る態度なるものが甚だ軽い調子になつてある。即ち皆様にする時はそれ頂き度くならぬ、が頂けぬ。その頂けぬ者を何處迄もお見捨てなくその者に遣る瀬無く連絡をつけて下さる、その連絡の慈悲が有難いのである。それを從來の説教にそれ言はぬ。『唯仕やうが無い、その者をお助け』と、その慈悲でその仕やうの無いのが何う引くり反るか、その連絡を言はぬから然ういふことになつて来る。故に私その信者に『全體あなた何う頂いたのぢや』イヤ私知らして貰ふ迄は何う聞いても分らぬので非常な苦心しましたが、或るお方にお聞きすると、遣る瀬の無い御本願だから、その苦心には及ばぬぞ、この儘のお助けぞと、それを聞かして貰

つて大に安心しました」と。この人らしくさせて貰つた一面はあるやうであつたも、「それには及ばぬぞ」ては仕やうが無い。即ち茲でも『衆禍の波轉ず』なることは、炭が火になることである。或るものがあつてそのものが變はるのである。「如何程苦心しても此方の苦心ではゆかぬから、その苦心には及ばぬぞ」と、これでは「此方はせいでもよいのだ」になりて佛の方から助けて下さると、此方の力には及ばぬと、別々に聞いて居るの故連絡が無い。故に之だと親の手織りを着ながらも、

『出来ることなり』

他の綺麗なものも着度いな——之になりて原の心が毫も轉じて居らぬ。轉ずるは轉ずる方に力があるからして無くて、

轉ぜざる方に力があるからである。「汝、もつと旨い堅いのを喰べ度いといふのであるも、汝の病氣の身を考えて見よ、喰べられるか、喰べられぬか。その喰べられぬのが可哀想故その者に喰べさせやう……」即ち喰べられぬ者に喰べさせやう——の御眞實故茲に連絡がある。若し私の話に他と違つた點があれば茲一つ。そこで私共この親心であることを聞かされると初めて、

「今迄他が喰べられる積りて居つたが怖しき身知らずであつた。成る程喰べられぬ、病氣、仕やうのない、地獄一定。この誰一人見て呉れ手も無い凡夫に、心措きなく喰べさせやうとの大慈大悲の御眞實であつたか、有難い」と、このことわけ聞かされて、初めて今迄他が喰べられぬで殘念で——ならなかつた、涙を呑みて死ななければならなかつた、成佛出来無い、無念、怨み、仕て見やうない私の心に初めて納得がいき、心底から腹ふくれて、「そこ迄思ふて下さる御慈愛であつたか、難有い」と茲で悟りと言ふは言ひ過ぎてあるも、若しこの満足が出ぬならば、私が出ぬ方が間違ひであると斷言する。

一五

故に聖人は悟りとまでは仰せられぬも、本願力にあひぬれば、むなくすぐる人ぞなき、功德の寶海みち——て、煩惱の濁水へだてなし。今池山夫人が、子供を控え夫を控え親を遣して往かんならぬ、——爆發ならば一思ひであるも、癌であればチクチク刻みにゆかんならぬ、何とも遺憾千萬であるその心持ち、その仕やうの無い心根を、「哀はれ、察した

ぞ！」——この本願の御眞實、「本願力に遇ひぬれば、空しく過る人ぞなき」——之は私入信の時感じた、恰も空氣が肺臓内に入れば、

肺の氣胞の先き——迄も充ち満る如く、「功德の寶海みち——て、煩惱の濁水へだてなし。」——こは曇鸞大師の言葉で言はれた『和讃』であるも、善導大師も

若し我佛を成らんに、十方の衆生、我が名號を稱して下十聲に至らん、若し生れずば正覺を取らじ。彼の佛今現在に成佛したまへり、當に知るべし本誓重願虚しからず、衆生稱念すれば必ず往生を得。

即ち我が親心の粥を興へて十方の喰べられぬ病人に腹ふくらせてやらねば我は正覺を取らぬと誓はせられた彼の佛。その佛が今現在に成佛して我々に向つて居て下さるゝは、即ち私のこの仕て見やうなき業病を、何處々々迄も見て下さるとの事である。故に「當に知るべし……衆生稱念すれば必ず往生を得」即ちその親心の名號に腹ふくれて南無阿彌陀佛々々と。——こは先の『執持鈔』の「我すてに本願の名號を持念す。往生の業すてに成辨することを喜ぶべし」の御文も茲と同じである。即ち斯程迄私に満足させてやらねばならぬ

の本願力に遇ひ奉れば、如何に欠陥多き人生、——即ち何時知れぬ、死の縁無量、病氣、劍、水死、爆發、彌々となれば無念、殘念、煩惱起す外無いに決まつて居る、それ煩惱具足の私故、その私を何處迄も哀はれみ見て下さる大慈大悲にてましますとである。即ちそこになると、私が仕やうなければ仕やうなき程、悪しければ悪しき程、その悪しきに何處迄も合ふやうに仕て下さるお慈悲の蓋である。即ち

函蓋相應。この御眞實にてましますは私共満足出来やう筈が無い。そこは他く迄も私の心の形に合ふやうに仕て下さる御眞實。今この丸い水瓶に四角な蓋をするのでは、いつ迄経つても片がつかぬ。即ちそこは向ふ様から何處迄も意を先きにして、私の仕て見やう無さに寸隙無く合ふやうに仕向けて下さるお慈悲である。故に私共死んでも死なれぬ、化けて出る人生。化けて出る迄迷はんならぬ、その仕て見やうなき心中を一子の如く思召し下され、「汝辛いだらう、その爲め現はれた親なれば、汝救はずば親とは言はれまいぞ」と、即ち私共救はれずば佛が來生して下された所詮が無くなつて仕まふのである。故に佛のことを

爲物身といふ。そこは基督教の神様は最初より存在する創造の神様である。今他力の阿彌陀佛は、迷へる衆生を救ふために、態々姿を現はし下された救ひの佛である。てなければ救ひの親といふことは出来ぬ。故にその遺る瀬無き救ひの御眞實の故に、終に仕て見やうなき御同やうが、心底より救はれ、満足して、初めて人生の闇破れ、南無阿彌陀佛々々と、茲に於てか『衆禍の波轉ず』——反すも——も私共の仕て見やうなきと、それを他く迄も御見捨なき大悲の御眞實と、この連絡の處が肝腎である。序に近頃は青年求道者の來訪に接することが多いのである。何うも近頃又一時期求道の機運が動いて來たかと思ふのである。その來る人が『信する』と孰れも信するに力を入れて言ふ人が多いのである。そういふ信するなら自力の信である。爾らず、親鸞聖人の純粹他力は、私の仕て見やうなきを斯く迄に言はるゝ御眞實を聞くこと、その御眞實が私の不實に徹して、その時が信じたのである。私の方は如何しても『信じられぬ』『難有く思へぬ』『その私に親の方が』『その汝の不實の性を我は斯

く迄も遣る瀬無く思ふ』と言はるゝ、この親心聞くことその心徹してその者が初めて『有難う』となるのである。すると皆様が、『親がさういふ風に言はれるることが分らぬ』と言はるゝ、最もである。他力は善知識の言葉の下に『汝の親が汝の仕てやうなきを斯程迄に思つて居らるゝぞ』と言はるゝ、それ承つて『あゝ然うであつたか』と分つて來るのである。『イヤさう聞いてもさういふ風に思へぬて困ります』と言はれる。『イヤ貴方が思へやうが思へまいが、思はぬを承知してその貴方を親から斯く思つて居るとの勅命ぢや』と申上げる。恐れ多けれども 陛下の勅命煥發とあれば、繪言嚴かにして畏み奉るの外は無い。即ち此方の思ふ思はぬは百も承知で、その者を哀はれみ捨てぬとの親の勅命が、本願招喚の御眞實であるとのことを申上るのである。

而してその本願が何處に在るか、私この度び池山君方及び九州に参り、その慘狀の眞中に於て、この慈悲を話させて頂き、却つて聞いて皆様が喜ばれる皆様の御喜びの上にこの御眞實を見せて頂き、此方の方が反對に教化を蒙つて歸つて來たやうな次第であつた。即ち私共人生實に炭坑同やうの有様、何時何うなるか知れぬ。現に今癌に罹つて往かんならぬ病人。而してその人が斯く不思議の御眞實の故に満足させて貰うてゐてになる。その有様を親しく見せて貰ふて來たと共に、斯くいふ私自身が現に同やうの身の上、又皆様に於かれても同じである。即ちその仕やうなき有様を遣る瀬無く思召し下さるが本願の御眞實にてましますことを喜ばせて貰うて來たことである。極言すると、この世は實に罪惡の人生、それを救ふために本願の眞實が現はれ、その爲めに眞實報土を御成就下された。若し人生本位、この世本位の宗教なら、無碍の大悲はむだ事である。煩惱具足の凡夫火宅無常の人生、その仕方なきを哀はれみ給ふ大悲の眞實が、五劫永劫の御眞實となり、光を放ちて待ち受け給ふ盡十方無碍光佛のお姿と現はれ、無量光明土も之より報ひ現はれさせたのである。即ち『大悲の願船に乗じて……速に無量光明土に到へて、大般涅槃を證し、普賢の徳に遵ふなり』——即ち信の一念に破開滿願と、この思召一つに満足させて頂けば、その者が命畢ると共に速に無量光明土

に到り、大般涅槃の證を開かせて貰ひ、普賢の徳に遵ふ。即ちその者が慈悲の故に極樂淨土に往生して此の度びは自由自在に人を救はれる仕合せをえさせて頂くことであります。已上。

初飛鳥岡本宮御宇天皇の末、登極位、號曰田村皇子、是時少治田宮御宇、太上天皇、召田村皇子、以遣飽波葦瑤宮、令問廢戶皇子之病、勅病狀如何、思欲事在耶、樂求事在耶、復命蒙天皇之賴、無樂思事、惟臣伊罷凝村始在道場、仰願奉爲於古御世御世之帝皇、將來御世御世御宇帝皇、此道場乎欲成、大寺營造、伏願此之一願、朝廷讓獻止奏支、天皇受賜已訖。又退三箇日間、皇子私參向飽波、問御病狀、於茲上宮皇子命、謂田村皇子曰、愛哉、善哉、汝姪男自來問吾病矣、爲我思慶、可奉財物、然財物易亡、而不可永保、但三寶之法不絕、可以永傳、故以罷凝寺付汝、宜承而可永傳三寶之法、者、田村皇子奉命、大悅再拜白曰、惟命受賜而、奉爲遠皇祖、並大王下略

大和國正府寺藏伽藍緣起並流資財帳文



## 無碍の一心と他利利他の深義

三二

是を以て論主は廣大無碍の一心を宣布して、普偏く雜染堪忍の群萌を開化し、宗師は大悲往還の同向を顯示して慇懃に他利利他の深義を弘宣したまへり。仰て奉持す可し、特に頂戴す可しと。

親戀聖人「證」卷

### 人間は互に相碍えて居る

一 天親菩薩が『淨土論』の初めに於て、特に世尊我一心、歸命盡十方、無碍光如來、願生安樂國と、あなたの衷心を披握して、啓白の言葉を致された。それをば親戀聖人は『證卷』々末に於て、『論主は廣大無碍の一心を宣布し云々』と示されて、菩薩が斯くの如く、大廣無碍の一心を體得して、之をば普く廣く弘宣

し下されたる恩徳を慶ばれた。無碍とは碍えられぬといふ意味合ひである。碍えるとは我々人生生活の有様は、人々互に相碍え、相隔て、苦しんで居るのであつて、問題のある處、必ずこの爲に皆なが心を惱まして居るとなつて居るのである。

方の場合だと、誰しもすぐ分る。人と争ひ隔て、居る場合であると、誰しも氣づき易いのである。けれども我々人と互に相碍えるは、善き方の場合でも、碍るのである。譬へば我々『彼の人に恩がある、義理がある、返さんければならぬ』と考えるは、世間的にも道徳的にも、更に悪しきことで無い。けれどもその爲めに恩義に責められ苦しき思ひをせぬければならぬと思れば、恩義は無碍で無い。斯くの如く善き方の相對思想から、苦まされて居ることも我々甚だ尠くないのである。

三 例へば子を親が愛する爲に、種々に心配する。すると子の方は、親が自分の爲に心配して呉る、親の心を聞くに堪えぬとして心配する。親は子の爲め、子は親の爲め、互に相愛えて、よきことなれども、互に苦痛し相碍えて居る。斯くの如く『誰の爲め、彼の爲め』と考えて、相碍えて居ることが多いのである。斯くの如く常識より考えて、善きことと思はるゝことでも、相碍えて居ることが幾らもある、この故に善きに就け、悪しきに就け、人生に苦が止まぬとなつて居るのである。

四 空では分り難い故、茲に一方に淡泊なる無欲なる人がありとする。一方は欲深き人がありて、無欲の人に對して喧嘩する。けれども一方は無欲恬淡の人故、之に對して飽く迄辛棒する。すると一方は之をよき事にして、益々貪欲を發揮して、横着なる振舞ひをする。終に如何な無欲の人も勘忍し兼ねて、『あゝ迄やるのは非道い』となる。それを普通には一方が悪いといふるのであるけれども、それはそうあるに違はぬけれども、片方より飽く迄熱念く向はるゝ時は、終に如何な無欲の人も怒り出すは、即ち碍えられたからである。即ち人間同士は皆な斯くして、相碍えて居るのである。即ち日光明るき處へ一つの障壁が出来た。日光なら山河國土、諸の有形上の物にて、碍えやうとしても碍えられぬも、電燈の光なら壁にて碍えられて仕まふのである。即ち我々人間、立派な心、まことの心といふて居るのであるけれども、何か事が顯はれると、それだけ碍えられて仕まふは、人間の心が互に相碍えるやうになりて居るからである。

善いこと仕なすげ人に不足が

### あらはれて来た

五 之をいづもいふ私の場合で言ふならば、私が『自分は何處迄も献身的にやる、名譽利害を顧みずしてやる』と、これてやつて居つた私がいづの間にか『自分はこれ程至誠でやつて居るに係はらず、人が更に認められぬ、之はをかしい』となつた爲め、それ迄碍えられぬ心でやれて居た私が、この爲め人の爲めに碍えられて、最早や動けなくなつて仕まつたのであつた。すると茲で『自分は善く仕て居るのであるけれども、人が悪い』斯く考えて通るは常識的な行き方であるけれども、斯く言うて『人は何處迄も冷かなものである、冷淡なものである』と、人を悪しく見て畢るのは、或は人間同士の間ではそれでよいかも知れぬけれども、眞の精神上よりいふ時は、それ迄自分は立派にやれて居る、無欲でやつて居ると思つたのが、現に斯く碍えられると不足が出て来る處を見ると、本來無欲ではなかつたのである、正義の爲めにやつて居ると思つて居つたのが、本當にはやれて居たのではなかつたのである。更に言ふ時は、自分には淡泊無欲と思つて居

つたのであるけれども、斯く人の爲めに碍えられると不平不足が出て来たとして見ると、自分に然う買ひ被つて居つたのが非常な間違ひで、矢張り人に隔てられれば隔てる心のある人間。結局隔て、貪欲、我慢の止まぬ、總て名譽利害心から働いて居た、即ち有碍の人間であつたといふことに、残念ながらなつて來ざるをえぬのである。

六 するとそれ迄は分るが、その先き何うするか。これは世間修養の教よりいふ時は『人は犠牲的にやれ、献身的に働け、何處迄も無抵抗にせよ』——それは百も二百も承知であるけれども、茲になるとそれが唯言葉の上ばかりになつて、甚だ困る處なのである。マア皆さん、初めから腹立て、は悪いといふのなら、然う仕なければよいと考えて事は済む。けれども如何せん自分が善く努めたことが原で、斯く不平不足になつて來た、故にこれから善くすればする程彌々不平不足が起つて來るとなつて來るのである。初めから争ひ隔てが起るといふのなら、それ爲んければよいで事なく通れるのであるけれども、爲んければよいと考へて善く仕た丈けそれ丈け不足がいて、無我に努めた丈けそれ丈

け不平になつて來た。斯くあるとしてみると、斯くある限りこれていつ迄いつてもよくいける期は無ないのである。

七 恐らく今日の青年諸君の惱んで居られる點は茲にあるであらう。諸君が初めから自分は罪深いと考えて居らるゝ筈は無。設し小供の時より宗教を聞かれ、罪深い淺ましいとは言つて居られても、それは唯言葉丈けて、苟も道を聞く程の人は『何處迄も自分丈けは善く仕て行き度』之が根本になつてあるの故、必ずこれに進んで行き當つて惱んで居らるゝに決つて居るのである。すると私共善くし立派にすること、彌々動きがつかぬやうになつて居るとなるのである。

八 すると茲で我々何うするか、斯く我々善くすればするて五分々々根性が離れられぬとして見れば、その以上に最早出て見やうが無い。——處で言ひ度いのは青年諸君にこれをいふと、元來が善い事仕度いに骨折つて居らるゝの故、それを碎く話になるから、諸君に寧ろ失望を與へる。それは『然ういふやうに自分が善いこと仕度いと考えるのが名利心である、自分が善いこと仕て居ると思つて居るのが、隔て心の本である』と、

そこ迄いふのであるから、さう思はれるのは無理無い。けれども茲が肝腎である。『だから然ういふことは可かぬ』と言つてるのであると取られると、それが可かぬのである。皆さんにすると、『だから自分は可かぬ』と思はれる。『だから可かぬ』で皆なが行き詰つて居るのである。それはそれ迄の原則が、善くせな可かぬにあるの故、悪いと詰まれば可かぬと思はれるは無理ないのであるけれども、よく聞かねばならぬは茲である。

### 山口縣の方の行きつまられた所

九 しばらく話が轉ずるも、これで能く聽いて頂き度い。私は年々縁あつて山口縣に參る。昨年如き母病氣で、山口縣と香川縣と丈けにゆく。その山口縣は何うあるかといふに、私の信ずる儘を言ふと、山口縣の人は昔から正しきことをする思想が強い。今日でも維新の功臣が出られた丈けあつて、この思想が頗る強いのである。それ故私が參つて、『自分が善い、人が可かぬ』と考えて居るのがいかに』と言つても、山口縣の人に『通じ無い。』ナニ自分が善ければよいでないか、悪い

者を悪いといふに、何處が悪い』斯ういふ風になつて分らぬといふ人が多いためである。『それは普通には、善きをよしとし悪しきを悪しと思ふは無理ないのである、けれども人間に絶對の善は無いのであるから、自分ばかりが正しいと思ふて居るのは悪い』といふても、容易に理解されぬのである。

一〇 私には五六年續けて參つたのであるが、それ故初めの一年は全くそれが理解されなかつた。殊に山口縣のは小學校の先生達が主として聞いて下される會になつて居る。その小學校教育に就事して居られる方の一番力として居られる處は、『自分は何處迄も正しくやる』之を立場としてやつて居らるゝのである。故に理想的な話なら耳に入り易いけれども、『自分が正しいと思ふて居るのがいかぬ』となると、『それでは根本が立たぬでないか』となつて、私の話が分らなだらし。

一一 處が私が參つて段々と話する。『人間は皆な各自に自分の心を標準として善し悪し言うて居るの故、それいふてることが元來善く無いのだ』と。すると段々分つて來ると、今度は山口縣の方の苦痛は一通りて

あるけれど善いところもあると成る故それ程苦にならぬ。處が今の五分々々て、『自分が善い』と思ふて突進する、その事が皆な悪い』となる故、我々の残らずが皆ないかぬとなる。それ迄は根本原則が、『善きことはい、悪しきことは皆ないかぬ』之が唯一の頼みてやつて居る處へ、それが出て來るもの故もういかぬ、もう何うしても立てぬとなつて來るのである。即ち茲である。之で『斯う悪しくは可かぬ』と、皆んなが之れになりて居るのである。

### 私として經驗を得たことは

一三 處で茲て私として經驗を得たことは、斯く私が隔てが止まず疑ひが止まず、これにて可かぬので、私はこゝで動け無くなつて居た。そこへ他力は『その悪しくてもよいのであるぞ』と、これにて眞宗を聞いて居る人がある。これにて安心がさるゝならば、反道德的の安心である、眞實の安心では無いのである。爾らは何うするか。自分は如何しても隔て、疑ひが止まず、五分々々の喧嘩性が止まず、これにては可かぬ』と、何處迄もこゝでこの行き詰りが無くてはいかぬ。そこへ私が

なくなつて來た。『ウン然うか、今日迄正しいと思つて居たのが非常な間違ひであつた。するとこれから何うしたらよいのか』と。——之から間違はぬやうに仕やうと努めれば努める程、そのことが間違つて來るのだから、茲實に困る所なのである。茲になると理屈でなく、弱る處がある。現に或校長如き、『入らぬこと聞かされたもの故、……自分がドシタ々思ふた儘にやつてゆくことが可かぬと聞かされて、校長にあつてその職を執ることが出來ぬやうになつて仕まつた。何うしたらよいのか』と訴へられた方さへあつた。當り前なら間違ひがあると知らされると、『それなら之から善く仕て行かう』それで通れる處なのであるけれども、今迄自分の仕て居つたこと、首が拗斷れても間違はぬと思ふて居つた處に、そう思つて居るのが間違ひであつたとなるもの故、もう仕やうが無い。茲實に苦しい處である。眞面目な人程必ずこれに行き當つて、苦しんで居らるゝ方が多いであらうと思ふのである。

一二 私なども之が出て來る迄本當に罪惡といふことは分ら無いで居た。それまでは一般的に、腹を立て、親切がされぬて可かぬと言つて居た。すると悪い所も

飽くまでその隔て根性で人に向ひ、人を疑ひ、人を碍へ、人の温さを自分の冷さで消して仕まつ程の私であるのに、『その然うして居ることが可かぬぞ』と丈けでは、是れ又連も私は遣り切れぬ。

一四 そこへ、斯く此方は何處迄も冷かな心で人に向ふのに、その冷かてはいかぬぞでは、私の行き詰まりは取れ無いが、『イヤ汝は如何程冷かな、争ひ心で我に向つて來やうとも、それが止まらぬのが汝の性と、我はそこを理解する上は、宜しい、汝如何程それで向はふと、我は何處迄もそれをいかぬとは言はぬぞ』と。

『イヤ汝のその冷かな性が可哀相と、我はその性分に同情するの故、いかぬと言はぬ位のことではよい、その汝の冷かさを何處迄も我は見やうと現はれて來たのである』と、——茲可かぬと言はるれば、私は呆れられて仕まつ丈けである。察る冷かな汝の性が哀はれ故、『その汝を冷かに思はぬ』と向はせられる御眞實であるのである。

一五 空では分り難い故、茲に一人の犯罪囚人がありとする。既に犯罪者故處刑され、社會からも犯罪囚よ、前科者よと悪しく思はれて居るとする。爲に人間が冷

え切つて疑ひの心深くなり、人さへ見れば『俺を警戒してのだらう』と狐疑心が強くなつて居るとする。それ故『俺にはこの悪いところがある、人は必ず悪しく思うて居るに決つて居る』と、その心で總てを見る故折角不愜に思うて同情して呉れてる者迄も『何んだ、同情して居るのに怪しからぬ。』之になりて益々いかぬやうになつて行くばかりである。他の人が折角親切に向つて呉れても、此方の心が冷え切つて居る故、『あゝ、あんな心で』と思はれてると思ふもの故、彌々隔てて、相手にされなくなつてゆくばかりである。

一六 處が今假に茲にその犯罪因に眞に同情を持つた人なら、『設し汝は何程その冷かな心で我に來やうとも、それは汝に於ては無理が無い。それは汝不幸にして罪を犯し、人から疑ひの眼を以て眺めらるゝ身の上となり、自分に於ても情の冷を切つた、汝は冷却せる處の人間である。故に設へ人が同情して呉れても、夫れを有難いと受け入るゝ能はざる迄に心が冷え切つてしまつた、無理が無い。故に我は寧ろ汝がそこ迄冷え切つてしまつた、そこを氣の毒と同情するのである。故にその汝が如何程我に冷に來やうとも、それを我は

何處迄もそれでは可かぬと言はぬのであるぞ。その然らざる處を何處迄も見てやらうといふのが我が聊かの同情であるぞ』と、これが眞實實意ある人の言なのである。

一七 處が我々此方の冷え方が一通りでない故、そんなこと一應言はれても、成る程一寸氣持ちよいやうであるけれども、『結局こんな有様になり果て、は何と言はれても最早や駄目である』と、我と我が心で冷かになり、『いかぬ』の考が何うしても茲で止まぬのである。即ち私の煩悶は茲であつた。即ち『これ迄人にも他く迄善く仕て來たのに、斯程迄に隔て疑ひ深くなり、こんな性分では必ず人が呆れてしまふに決つて居る。こんなでは可かぬ』と、結局最後は何人も之になつて來るに決まて居るのである。

### 自分で自分に慈悲を言ひ居る信仰

一八 そこで話が少し強くなるけれども、若しや皆さんの中に茲で斯ういふ聞き方になつてある方がありはせぬか。それは惡しさの止まぬと迄は、皆な分つて繰反しても結局我が力では安心出來ぬでないかとの事を申したのである。

一九 すると今私共がそのいかぬ心が如何にしても無くなしきれぬ、『その無く爲しえぬのが氣の毒と我は理解したのである。故に汝が四方八面、人が自分に氣を隔て、居る如くに思へて來る、そのそう思はれる冷えた汝の心根が哀はれとそこを同情する我である上は、設し汝が何程その心で向はうが、他く迄惡しく思はぬぞ』とある盡十方無碍光佛の心、お話致し度いはこゝである。その思召を我々此方から聴くとすれば、それは此方からそう思ふことになる。此方から佛を思ふと、眞に向から思つて下さるとは、そこに雲泥萬里の相違が出來てるのである。

### お慈悲に對する二種類の挨拶

二〇 譬えば我々遠く郷里を離れて都門に出遊して居る處に、郷里の親から人に托して傳言を仕て來たとする。『追々寒さの頃となつたが、汝は東京の地で如何暮して居るか。親も斯く』の有様で居るから、親の事は決して心配することは入らぬ。併し風でも引かぬか

居らるゝのである。即ち斯く彌々いかぬとなつた際に於て、『この惡しさの止まぬのを哀れんで下さるのが佛である。』斯ういふ者を惠んで下さるのが慈悲である』と、斯ういふて茲を濟まして居られる方がありはせぬか。若しそれなら、それは自分で自分に言ひつてゐるのでは無いか。自分で自分に『斯ういふ者を』と、それでは意味をなさぬのである。自分が貧乏で困つて居る時に、『斯ういふ者を』と、何程空にそれて撫ておろしても、本當に金でも呉れぬ中は、百邊それを繰反しても、結局何にもならぬでないか。若しや皆さんの中に、『佛は私のこの淺間しいのを助けてある』と、唯そういふ言葉丈けて安心のやう思つて居らるゝ方がありとすると、それなら何か事があるとその安心は消えてしまふて、残るは自分の惡しさ丈けになつて來る。これは修養的に喜んで居らるゝ青年の方などに屢々ある。それはその人の慈悲と思つて居らるゝのが、實は自分で自分にそういふ言葉を繰反して居らるゝに止つて居るからで、言ひかへれば本當は惡しさ丈けしか無いことになつて居るからである。これは寧ろ私共彌々自分が可かぬとなると、『斯ういふ者を』を百邊

と、親は案じ暮して居るのであるから何うか直接子供に遇つて親の思ふて居る處を傳へて來て呉れ」との傳言をいふて來て呉れた人があるとすると皆さんこの傳言を何う聞かれるか。之に二種類の挨拶が出て來るのである。

二一 先づ今迄他力を聞きつけて居る人の側は「あゝ然うですか、イヤ私も親は然う思つて呉れられてあると思つて居た。實は此間も手紙が來て、親がその思召であることは私も分つて居た。態々言つて來て下された御親切の段は有難いが、併しそれは能く承知して居た處である」となると、それは「分つて居る」の挨拶になる。大抵今日の所謂信者の人の「佛の慈悲は頂いて居る」は是れである。これだとそのことは既に先刻承知だになつて、若しこの有様で佛のお慈悲は分つて居る言ふとする時は、態々傳言仕て來た人は馬鹿になる。すると何うしても茲で言はねばならぬは「それは貴方分つて居ると言はれるも、自分は親しく國に居て、日夜親が貴方のことを思ふて居られる實況を見て來たから、それを知らせに來たので無いか。親は貴方が思つて居る位のことと無く、晝夜に貴方の事を心配して

を言はれるは、大抵自分で自分に然う思つて居らるゝのであるから、眞實同情の仰せ出て承はつたにならぬ。處が今佛の御眞實なることは、「私が如何に悪しからうが冷からうが、その冷かの者を飽く迄それはいかぬぞと言はずに、それを哀はれに思ふが故に、何處々々迄も同情するぞ」とある、この大慈大悲の御仰せ出てにてましますのである。

### 心の底が抜けるなり

二四 處が今のは「分つて居ります」の答をせらるゝ方を申したのであるが、修養的青年の方の挨拶は「丁度之と正反對に出て來るのである。何うかといふに「ア、ソ一ですか。親は夫れ程迄に私を思つて呉れるのですか。それとは知らずに私がかゝつて居つて、實に濟みませんでした」と、今度は自分の思はぬことを氣にする方に出て來るのである。片方の人は何も親がその通り思つて居るから、君も思へと言ひに來たのでは無い。「貴方の思つて居ぬことは親も能く承知して居る。けれどもその思はぬ貴方のことを親はこの如く思つて居るぞ」と言ひにきたのである。「だから貴方も

居られる。それを貴方分つてるといふ程なら、自分が態々訪ねて來た所詮が無いでないか」と。こゝ皆さん何うであらう。親が思つて下さると自分で思ふて居ると、親の方が眞實思つて下さるとは、別である。

二二 マア何か實際問題で、我々何か罪惡を犯し、自分のやうな者、必ず周圍から悪しく思はれて居ると、内心頗るヒヤ々々とした心持ちで居るとする。そのそある時「こんな者を飽く迄隔て、下さらぬのが佛である」と、斯く何程自分の方で考えて見た處が、それでは何等實際の力にならぬ。自分が今實際蹉跌して、仕て見やうなく惱んで居る處に「斯ういふ者を助けて下さるが佛である」と、如何程自問自答して見た處が、それでは何とも仕て見やうが無いでないか。處が今實際その苦しみ心中を見て呉る人ありて「その惱ましいのは無理が無い。その苦しいのに同情するのだ。愚痴のある丈けを遠慮無く出さない。如何程貴方はれやうが、何處々々迄も察します」と、現に私の方から斯く申出したを聞かれたのと、自分で自分に繰返して居られるとは違ふのである。

二三 處が普通皆さんが「お助けと頂いて居ります」

思はんならぬぞ」と言ひに來たのでは無い。

二五 故に寧ろ茲は私遠慮無く言ふ。皆さんの方に「有難い、嬉し」との心が、起つて來やう譯が無い。否な反對に人を見れば疑ひ隔ての苦惱の生活しか出來無い我々なのである。爾るにその苦惱を見て下されて、「その生活が無惱ましからう、無理が無い」と、疑ひ隔てる心を飽く迄疑はず隔てぬ心を以て眺めて下さる親のお心を申し度いのである。すると茲で如何に疑ひ隔てる私も、如何に此方が疑ひ隔てやうが、それを百も承知して「その然うある故に、そこを氣の毒にこそ思へ、悪しく思はぬぞ、否な然うある處が、我が同情を絞らずにはあらぬ處であるぞ」と、何處々々迄もこの疑ひ隔ての私に疑はず隔てぬ心を以て向うて下さる無碍のお光。この廣大無碍の慈悲の光に遇へば、このお光の爲に茲で私の心が何うなるか。

二六 茲は言葉で聞かれずに、——言葉で「それ程迄に言つて下さるか、有難いと受けるのだ」になると、今迄の信者の人の挨拶振りになつて、私氣に入らぬ。茲は寧ろ私は「それ程迄に言つて下されても、私の隔ては止みませぬぞ」と答へて頂いた方が眞に近い。處

へ『その止まぬのは汝の性である。それ故その性を我は哀はれと言ふの故、隔ての止まぬに係はらぬ。その止まぬ汝の性を我は何處迄も見てやらうと言ふのであるぞ』と、斯く無碍に言はるゝもの故、茲て私共心の底を抜かれる處が現はれて來る。こは禪家でも心の底が抜けるのだといふことを言ふ、所謂徹底の一念である。

二七 心の底の抜けるのは、我々自分では心の底は抜けやせぬ。自分でやるとなると、『こんなことは』と、二重にも三重にも底に底ある私の心である。即ち『……と思ひ度い』が底である。『……と頂き度い』が性格である。『その性格の故に、何時までも苦惱から離れられぬ、その性格が哀はれと、その性格に同情するのである上は、如何に隔てゝも疑うても、その汝を飽く迄我は疑はぬぞ、隔てぬぞ』とある仰せ故、寧ろ私の心持ちより言ふ時は、『君は隔てるのがそれが性故、何うなりと君の勝手に思うて居り給へ。君が何う思はれやうと、君のそらいふ風に思はれる、それを氣の毒と同情する僕なれば、何と思はれやうとそれを意に介せぬのだ』と、こゝ如何にも無碍極りの無い仰せ故、如

何に疑ひ隔ての私も、その無碍の御眞實の故に、終に心の底を打ち抜かれ、『これ程隔ての者を、これ程冷かの者を、これをそこ迄呆れ給はぬ御眞實にたましましたか、恐れ入りました』と、初めてお慈悲に腹ふくらせて貰へる處の出て來るのは、即ち無碍のお光の爲に有碍の私の心の底を抜かれたからである。即ちそこをば

論主は廣大無碍の一心を宣布して、普偏く雜染堪忍の群萌を開化し。云々  
又『和讃』には、

盡十方の無碍光は、無明のやみをてらしつゝ、

一念歡喜するひとを、かならず滅度にいたらしむ。

無碍光の利益より、威徳廣大の信をえて、

必ず煩惱のこぼりとけ、即ち菩提のみづとなる。

こぼりおほきにみづ多し、さはりおほきに徳おほし。

斯く言はれてあるが茲の處なのである。

### 仙臺、某禪家が入信の筋道

二八 こは序であるから申すのであるが、私は折々仙

臺の求道會に出席する。仙臺に面白き僧分の方があられて、禪家の方である。禪家の袈裟、法衣を着せられて、南無阿彌陀佛々々と念佛しながら、私が參ると必ず聞きに來て下さる。こは古くからのことにて、私卅二三年頃來參るといつも必ず來て下される方である。

二九 その然うなられたもとは、この方は初め參禪に苦心せられて美濃の虎溪あたりに行き、或る意味で禪の悟の徹底が出來た人であつた。それ故自分を非常に偉く考へられ、仙臺地方で他の僧家の方に對して、えらい調子で臨まれて、その爲め却つて反感を買ひ、總ての人から隔てられ、迫害せられ、四方八面からやつつけられて、殘念で／＼たえられなくなつて來た。『外のことではならなれども、佛の教えのことにて隔てられ、苦むといふは甚だ善く無いことである』斯く考えられた爲め自分の方から折れて、或る臨濟の坊さんの處へ出かけ、『全く自分の方が悪かつた。何うかこらえて呉れ』と謝罪された。處が向ふは腹立て、居る處故、『そらいふ風に他へ内密で來るといふことが無碍千萬である』——然ういふことになつて、その爲め却つて

仲問の人より宗旨彈きを決議せられ、管長までも届けられるといふことになつて仕まつた。その方にする時は自分の心に、確に他の人達よりは、明に徹して居る覺えがある。爾るにその爲め却て斯くの有様となり、終日終夜唯々苦しみ抜いて居られたのだらうである。

三〇 處がその頃仙臺に於て眞宗説教所が開かれることになり、丁度適當なる場所が無つたもの故、その方の禪寺を借りて開いて居た。之は禪宗の寺院を借りて開いたといふことが、仕たものもをかしいし、させたものもをかしい。それ故その方も『自分もをかしいと思つたからそれ迄斷らうと思つて居た』といふて居られる。その時この方は苦しまぎれに一夜佛前を見られると眞宗説教所に借りてある關係から『三帖和讃』が置いてある。何心なく手に取りて今の處迄讀んでゆかれると『盡十方の無碍光は、無明のやみをてらしつゝ、一念歡喜するひとを、かならず滅度にいたらしむ』——  
三一 何て難有くなつたのか、涙が出て來たのか分らぬが、『ア、自分のこの有様が無明である、この無明をそれ程迄に哀れみ思召し給ふのか』と、『一念不思議の盡十方無碍光のお心に氣づかして頂かれると、直ぐ次

には『無碍光の利益より、威徳廣大の信をえて、かならず煩惱のこぼりとけ、すなはち菩提のみづとなる』  
 一 即ちその不思議の御眞實に氣づかせて貰はれるなり、いつの間にかこれ迄堪ふるに堪え得なかつた煩悶の氷解け、『罪障功徳の體となる、こぼりとみづのごとくにて、こぼりおほきにみづほし、さほりおほきに徳おほし』  
 一 即ち飽くまで自分が正しいと言ひては隔て、人が悪いと言うては疑ひ、この疑ひ隔ての性分の私である。その隔ての私の、その隔てを氣に仕給はぬ位の事て無い。情けある人の同情までを隔て、無にする私の怖ろしき性に對して、『それは汝の性ぢやもの、それの出て來るのは無理が無い。その出て來るのを同情するのぢや、それあるが爲め哀はれて現はれたのぢや』とある、廣大御眞實の無碍光佛にてましますのである。  
 三二 そこでそのお心でましますことを一度び知らされて見ると、元來隔てるのが本來自性であつた處の私が、誰に隔てる彼に隔てるの語て無い。愛兒をじつて泣いて居らるゝ處の人に、『その泣けるのは無理が無い、悲しいのは尤ぞ』と、何處々々までも此方の悲みを汲み取つて、隔てず疑はず言はれる御同情である爲め

に、終に如何な悲みの人も『かならず煩惱の氷とけ、すなはち菩提のみづとなる』  
 一 茲は反すゝも『斯程迄の思召であつたか』と自分で自分に思ふので無い。  
 向ふから事實にこの同情で言はれるもの故、人さへ見れば仇と思ふ私が、初めてその御同情の程に頭が下りて、『すなはち菩提の水となる。』  
 一 之が廣大無碍の一心なることなのである。この廣大なる慈悲の故に、初めて我々廣ろゝとした世界に出て、即ちその無碍のお心が私の心に貰はれるとなつて來るのである。即ち『論主は廣大無碍の一心を宣布して』と讃仰なさるなければならなかつた次第である。

他利々他の問題

三三 以上思はず『廣大無碍の一心』に力が這入つて仕まつたのであるが、今日主として言ひ度かつたのは、『他利々他たれたれの深義』にある故、即ち簡単にその深義なることの出所丈けを聞いて頂いて置かうと思ふ。今いふ天親菩薩の一心から現はれて來る五念門の行なることがあつて、即ち一には禮拜——佛を禮拜することである——二には讚歎——南無阿彌陀佛々々と佛を讚歎

するのである——三には作願——佛の淨土に生れ度いと願するのである——四には觀察——淨土の有様を心に想ひ浮べるのである——五には廻向、こゝは以上四種の行を自分の爲めの行とせずして、一切衆生の爲めに廻向する廻向門である。これらのことは大分専門に涉る故、細くお聞きに下さらなくてよい。つまりは天親菩薩の一心から來る五念門の行なることがあつて、中初めの四は菩薩自利の行と申して、自利の爲めにする行であるが、第五の廻向門は、その自利の行を諸の衆生に向へ廻らして、利他の爲めにする、利他の行といふことになるのである。故にこのことを『淨土論』には自利々他たれたれの行と言はれてあるのである。  
 三四 處てその天親菩薩の自利々他と言はれたのを曇鸞大師が『論註』に於て講釋せられて、一方自利とあるのだから之に並べて他利とありてよさそうなるものを、何故特に利他と言はれたかといふことが言うてありて、之に意味深きことが説かれてあるのである。その處の『論註』の文を拜讀すると、  
 論に五門の行を修して以て自利利他成就したまへるが故にと言へり。然るに茲に其の本を求むれば、阿

彌陀如來を増上縁と爲るなり。他利と利他と談ずるに左右有り。若し佛よりして言はば、宜しく利他と言ふべし。衆生よりして言はば、宜しく他利と言ふべし。今將に佛力を談ぜんとなす、是の故に利他を以て之を言ふ。當に知るべし此の意なり。凡そ是れ彼の淨土に生ると、及び彼の菩薩天人所起の諸行は、皆な阿彌陀如來の本願力に縁るが故なり。何を以て之を言ふとならば、若し佛力に非ずば四十八願便ち是れ徒らに設けたまふらん、今的く三願を取つて用ゐて義の意を證せむ。云々。

他利々他深義私見

即ち要するに自利他利と言つて爾るべきに、今は何故自利利他とあるかといふ問題なのである。而して古來宗乘學者が之に骨折るも、何うも茲の解釋がすつきり仕て居らぬのである。  
 三五、先づ『他利と利他と談ずるに左右有り、若し佛よりして言はば……今將に佛力を談ぜむとす是の故に利他を以て之を言ふ。當に知るべし此の意なり。』何うも之れが意が取りにくくて困る所、古來諸種の説があ

る所なのである。併し先づ私の言はんとする所を申すに、こは寧ろ説としてよりも信仰の問題として、即ち先きいふ親の傳言の問題になつて来るのである。即ち親の方から子供を斯く々々思ふぞと親の方から言うて来て下されるは、之だと佛よりして言ふ利他となる。

處が『イヤそれはマア々々、能く分つて居る』となる。と、衆生よりして言ふ處の他利となるのである。故に私より言ふ處の他利である限り、眞に親のお心を聞いたにあらぬ。『親は助けて下さるのである、隔て、下さらぬのである』と、此方から思ひ、言うて居るのは之では佛力の顯はれ出やう餘地がなくなつて居るのである。之は餘程氣をつけぬと、あることだから能く聞かれぬはならぬ。

三六 こはかの囚人の場合で言ふ時は、囚人が人を見ると、必ず自分を悪しく思ふて居ると四方八面に隔て深く、動けなくなつて居りながら、『この隔ての自分を飽く迄隔て、下さらぬのが佛である』と何邊それを繰返すも、それはちつとも隔てが止まぬのだから何にもならぬ。そこへ思ひがけなく一人の人來り、『その隔ての起るのは君の身の上として無理が無い。それはさ

う思へやうとも』と、何處までも隔てず面の當り言ふて下さる處の聲聞くと、『この隔て心の私をそれ迄隔てずに言うて呉れる處の同情か、眞實か。難有い』になつて、それで始めて満足がゆき、隔てが取れるのである。

三七 猶ほ言ふと茲に一つの氷の塊がある。『この氷の私を救うて下さるのが佛である』と、氷の方から救ひをひつけるとなると、『イヤ如何に慈悲深い人も必ず自分のやうな者、冷いと云ふにきまつて居る』と、それは總てを冷すのが氷自身の性であるから、そうなるに決つて居るのである。處が今茲に日光來り、その氷の冷かさを照す『氷を照らすのが日光なれば、汝の冷かさを有らん限り照すぞ』と、冷かさを有らん限り照らされて、氷の限り解けてしまつて見ると、日光の前には氷は無くなつたが、他のもの、前には氷が有るのか何うか、有る譯は無いのである。それは冷たい私の氷全體が残らず融かされたのであれば、『佛の前では融けてしまつたが、人には矢張り冷たいものがある』さういふ事がある筈は無い。

三八 處が動もすると氷を毛布で包んだ具合に、『こう利他となるのである。』

### 眞宗にていふ如來廻向の思想の淵源

いふ冷なもの』と氷が中から言うて居る有様であることがある。それだと融けぬから眞實の安心にならぬ。處がそれを他力の信仰状態と思ふて居る人が数多くある。それは自分で他に利せらるゝのであると、唯救ひの水源を眺めて言うて居る丈けのことで、本當に他を利して下さる眞の御同情が到つたので無いから何にもならぬ。處が今眞の御慈悲の上より言ふ時は、その氷に向はせられ、『その汝の冷たいのは無理がない、何程冷からうが、冷い限り飽く迄呆れぬぞ』と、現に氷の私に言うて下さる有難い思召と、それを知らざるゝもの故、如何な冷かな氷も初めて思召のあつきに恐入つて、即ち『煩惱の水とけ、菩提の水となる』今迄疑ひ隔てゝ居た奴が、面の當りこの隔てを捨てずに、この隔ての者に斯程迄に言はるゝも慈悲かと、終にこの利他の眞實の故に、此方の隔てが立たなくなり、人に隔ての取れて仕まつた處が眞實の信仰なのである。處が多

くの信者が、自分の隔て深い處迄は言はるゝが、それを隔てぬ眞實の方は唯言葉丈けに言うて済まして居られる。それではなくその隔てに何處々々迄も同情して下さる眞實。之を感じ來つた處で、初めてそれが

三九 處でこの利他なることが非常なる影響を持つことになつて來た。即ち『淨土論』にある自利利他の利他なることが、斯ういふ意味の利他回向といふことになつて來た。それは今の『論註』の御文に『然るに竅に其の本を求むれば、阿彌陀如來を増上縁と爲るなり。云々』——阿彌陀如來が私の隔てを隔て給はぬ眞實、即ちその本は阿彌陀如來がこの不可思議眞實を以て向うて下された御本願、それになくば、『何を以て之を言ふとならば、若し佛力に非ずは四十八願便ち是れ徒らに設けたまふらん云々』——即ち親鸞聖人が他力の教で如來廻向を言はれた、如來回向は之から出て來たのである。

四〇 こは何から言ふとならば、先きの『淨土論』にある五念門の初めの四は自利、第五の回向は利他と、之は何で言はれてあるとならば、實は衆生の上で言はれてあるのである。衆生の淨土往生の行としての自利



利他といふことになつて居るのである。處が夫れが『論註』に來ては、今の如く『他利と利他と談ずるに左右あり……今將に佛力を談ぜんとす、是の故に利他を以て之を言ふ。……菩薩人天所起の諸行は、皆な阿彌陀如來の本願力に緣るが故なり。』とある、この意味の佛よりしての利他といふことが顯はれて來た故、茲てコロリと調子が變つて、廻向とは如來の方より他く迄私に廻向して下さる、如來廻向といふことになつて來たのである。

四一 而して廻向が既に佛になつて來た故、従つて五念門の他の四も皆な佛に轉じ、禮拜も讚歎も作願も觀察も、皆な自分の方からするので無し。自利々他總てが『發に其の本を求むれば、阿彌陀如來を増上緣と爲るなり。』——總てが阿彌陀如來が私を助けんとて、不可思議兆戴永劫の間禮拜し、讚歎し、作願し、觀察して、種々に善巧方便して、私を救ふ爲めにこの五念門の行を修し、それを以て殘らず私に與へて下さるが如來廻向と、淨土眞宗の如來廻向の源は實に茲から起つて居るのである。

四二 猶ほ一言するにこゝ、『入出二門偈』とて、親鸞

私の方より稱へるので無い。佛の方より選擇攝取の本願に於て、之を稱へしめやうとの佛の願心よりあるのである。斯くして第三第四の作願觀察を経て、第五の廻向となつて、

第五は出の功德を成就したまへり。菩薩の出の第五門とは、何云か廻向する心に作願したまひき。苦惱の一切衆を捨てずして、廻向を首と爲て大悲心を成就することを得たまへるが故に、功德を施したまふなり。彼の土に生れ已つて速疾に、奢摩他毗婆舍那を得、巧方便力成就し己つて、生死の菌、煩惱の林に入つて、應化身を示し神通に遊ぶ。教化地に至つて群生を利す。即ち是を出の第五門と名く。蘭林遊戯地門に入るなり。本願力の廻向を以ての故に、利他の行成就すと知る應し。

四三 而して親鸞聖人が斯くの如く示されてある、それが皆な今の他利々他の言葉から現はれて來たのである。故に聖人は『教行信證』に於て『……宗師は大悲往還の廻向を顯示して、慇懃に他利々他の深義を弘宜したまへり。』この言を以て『證卷』の止め言葉とせられであるは、こは私の言ふ如くに解すべきや否や、一概

聖人の晩年の作がある。それには『淨土論』に菩薩々々となるは、淨土往生の菩薩の意味で言はれてあるのを、強いて言うて法藏菩薩の事に仰せられてある。一應拜讀すると、

菩薩は五種門に入出して、自利利他の行成就したまへり。不可思議兆戴永劫に、漸次に四種の門を成就したまへり。何等をか五念門と爲る。體と讚と作願と觀察と廻となり。云何か禮拜す身業に禮したまひき。阿彌陀佛正偏知、諸の群生を善巧方便して、安樂國に生ずる意を爲しめたまふ故なり。即ち是を入の第一門と名く。亦是を名けて近門に入ると爲す。——即ち如來の方にて禮拜して、佛の方に近けよと、善巧方便の手立てを引きつけて下さるが第一の近門である。

——云何か讚歎する口業に讚じたまひき。名義に隨順して佛名を稱せしむ。如來の光明智相に依つて、實の如く修し相應せんと欲するが故なり。則ち斯れ無碍光如來の、攝取選擇の本願なるが故なり。是を名て入の第二門と爲す。即ち大會衆數に入ることを獲。即ち南無阿彌陀佛と佛名を讚歎する南無阿彌陀佛は、

には言へぬのであるけれども、私の言ふ他利は衆生よりして『他に利せらるゝ』と言ふ意味の他利に言ふのである。佛の方よりして『衆生が哀はれてある、悪しく思はぬぞ、隔てぬぞ』と言はるゝ、之を頂いたのならば如來より仰せ下さる眞の思召を頂いたになるのであるけれども、衆生の方より『佛がそう思うて下さるのである』と思ふて居る、それになると他に利せらるゝのであるといふ他利になりて、こゝ私獨斷なれども、之である限り私は畢竟それなら恐癡を言うてゐるのに過ぎぬと斷言する。自分が冷な氷でありながら、氷自身か思うて居るのは何と思はふともそれは畢竟眞言に過ぎぬて無いか。そこでその氷の思うても、眞言になる、その氷の冷さに同情して他より何處迄も温き心を以て向つて下さる、それが佛の利他の御眞實であることを申すのである。

### 利他廻向の意味

四四 そこで前號にも話した私に近接して居る一學生の人に、私『君のは自分の方から……と思ふて居る自分の思ひに過ぎぬて無いか』と指摘する。すると今迄

有難いと思つて居つたのが、一言に碎けて仕まつて、『先生何うしたらよいでせう、悪いばかりになつて仕やうがありません』と、泣いて訴へて見えた。私『イヤその悪いばかりの故、それは泣ける筈なのである。その通り心が展げぬ、展げぬ筈なのである。無理がない。その展げぬその苦しさに同情して、汝如何に悪い心が隔たらうと、何處迄も悪しく思はぬぞ、哀はれむぞとある御眞實である』とお話する。『イヤそんなこと何程言はれても私の苦しいのは止みませぬ』と言はれる。『イヤそれが止まぬから、止まぬのが辛からうとこそ同情するのである』と、即ち如來廻向は飽く迄此方の仕て見やうなきをそれではいかに恨と斥けずして何處迄もその者に遣る瀬無く言つて下さる、この意味のこゝになつて來るのである。即ち『和讃』には、

如來の作願をたすぬれば、苦惱の有情をすてずして、廻向を首としたまひて、大悲心をば成就せり。

四五 如來の作願は何處迄も此方の悪しきを捨てずに、その悪しきを哀れみて、廻向を首とし給ふ——茲は私の苦しんだ時は、『自分のやうに悪しくは、人が呆れて捨て、仕まふ、自分の如き者は、最早や據り所

無い』これ私に苦しんだのであつた。現に斯く悪しく捨てられて仕まふ自分であるのに、佛の作願は、その人に呆れらるゝ氷の性の私故その私を何處迄も捨てぬ。その性質の私故、嘸惱まじからう』と、飽く迄私の仕て見やうなきを汲み取つて、此方が如何に冷な心で向つても、向へば向ふ程そうなる冷かさの同情して、何處迄も隔てざる大慈大悲の心を以て向つて下さる。即ち廻向はこの者を捨てずに、何處迄も遣る瀬無き心で向つて下さる、その事になつて來るのである。故に之を如來廻向と、之がなくば淨土眞宗、他力信仰は成り立ち得ぬのである。

四六 處が從來眞宗の安心を言ふ時に、此方の受け心ばかりに力を入れることになつてある故、ともすると此方の思ひばかりになり易い恐れがある。信者の人が『斯く／＼と頂きました』と言はれる、それが本當に頂いたのでなく、言葉丈けになつて居るのが多いのである。それだと私のいふ他力になる。爾らず佛の方より私の苦惱を察して向ふから此方へ、飽く迄斯く差し向けて言つて下さるが利他廻向であるのである。今この洋盃が『中に水が一杯になるのだ／＼』と、自分の方

から言つて居るのでは、何時まで言つて居つても一杯にならぬ。處が此方の瓶より斯うつがれるとなると忽ち一杯になる。今仕やうなき私に佛の方より『苦惱の有情を捨てずして、廻向を首として』何處々々迄もつぎ込んで下されるもの故、終に『私の斯く迄悪しきを左程に迄思召し給ふのか』と、即ちその一念に心の限り慈悲の水が充ち満ちて、『私が悪うムりました』となつて來た處が眞實の信仰であるのである。

四七 處が斯くいふと受け心が無いやうにはならぬか、然らばならぬ。どうして／＼浪々と受けられたお慈悲の水で一杯なのである。之があるから南無阿彌陀佛々々々と念佛に表はれ、人にも自然言ふやうになる。故にそれはあるのであるけれども、それは私の心にお慈悲を盛られた自然の結果である。故に先づ盛られぬ

ことには仕やうがない。即ち聖人が利他だ／＼と仰せ下されたのが茲なのである。『和讃』にはまた

定散諸機各別の、自力の三心ひるがへし、

如來利他の信心に、通入せんとねがふべし。  
四八 全體今日世間で他力の語が非常に誤解されて居るのである。今日新聞などに使はれてある他力主義な

る言葉は、放つて置いて人の仕て呉れるのを待つて居るやうの意味に言つてある。自分は手を空しくして他に突きやつて置いて——それは他力といふも力である點がない。力とは斯く大悲の心遣る瀬無く、飽く迄捨てずに向つて下さる御眞實の故に、終に此方が救はれて仕まふ處が力であるのである。今日の人のいふ他力は、力の字が更に働いて居らぬ。之を要するに他力は、佛よりして他なる私の苦惱を見て、之を利し給ふ——飽く迄力なく空虚の私に、之を哀はれむが故に何處迄も遣る瀬無き眞實を加へ給ふ、此の利他眞實の一心であることを申したのである。

### 信仰なる珠玉を得ることに非ず

四九 そこで最後に今いふ私が申した爲め、これ迄の信仰が壞れて泣いて來られた、その方に私は種々同情してお話した。けれども然らうなると『私は悪う仕やうがありません／＼』とのみ言はれる。私は申したのである。君の今迄の喜びは、何か手の平に信仰の珠玉も持つて、喜んで居つた有様である。丁度龍が珠を持つて居るやうの形である。處が龍が珠を取られて龍が泣

き出した。龍が珠を持つて、これだ〜と好い氣で居る限り、龍は本當に救はれて居らぬ。角はやした恐ろしい姿で、殊勝さうに珠をかへて居る。それ見るとそのとうして居る有様が危なくて慈悲ある人の方では救はずには居られぬ。——之は聖人の御言葉にも喩ば阿伽陀藥の能く一切の毒を滅するが如し。如來誓願の藥は能く智愚の毒を滅するなり。(信卷)

我々信仰だとなると、『信仰ぢや〜』で過つてゆく、そのとうなる危い有様が可哀相で眺めて居られぬ。即ち佛は時によると、その怖しい龍の上にも駕し給ふ事がある。即ちその龍の驕慢な有様に飽く迄愛相をつかさず何處迄もやるせなくして下さるお慈悲の故に、終にその龍が救はれて我慢の角が折れ、南無阿彌陀佛々々と謝罪り果てるやうになる。處がその龍に信仰の寶珠などやると、よい氣になつて中々頭を下げぬ。これは皆さま、信仰が分ると『サア之だ』と、忽ち振り廻はし威張り度がる御同やうであるのである。故に決して信仰の珠など與へ無い。爲に失望して泣く〜出て行く私の袖を引き捉らえて、『親は汝のその據るべなき様が可哀相故、汝の一身は引き受けたぞ』——この一言を聞かされた時には私共『金を貰ひて』では無い、この仕やうなき自分の、仕やうなきを哀はれみ、見捨て玉はぬ御眞實であつたか、有難う』と——茲は何處迄も私

共信仰の珠が貰へるので無い。貰へぬ自分を遣る瀬なく大悲のち心で向はれるのであることを明に仕て置き度いのである。こはちとひどすぎるかも知れぬが、低い方が信仰の珠が砕け取られて仕まつたとなると、『その珠を取返し度い』の態度に出られる方が多いのである。然うては無くその珠を失くした心淋しさを哀はれみ給ふ御眞實の故に、その者が攝取心光中におさまとられて、初めて安心させて貰はれるのである、このこと申すのである。

五〇 以上私の他利々他深義は、少し言ひ過ぎてあつたかも知れぬ。現にこれに就きては古來『他利々他深義辨』などの著書さへありて、諸種の説があることである。現に香月院などは之を『他を利する』と『他が利せらる』とにいふてある——私のは他に利せらる、であるから、他が佛になつたり、衆生になつたりする、それが香月院には氣に入らぬ。併し香月院ののつてアクデブに言ふとバツンとにいふとに於て、これでは文典に於て深義なる點が顯はれぬと思ふのである。併し之は私の除り買つて下さらぬ方がよい。それは兎に角今日『斯る者を〜』と此方から思ふ思ひ丈けになつて、眞實の安心がえられて居ぬ方が尠く無いやうに思ふ。自分が道樂して金使ひして置いて、親は『斯ういふ金使ひする者を〜』と自分で撫ておろして居る信仰である、その極甚だ危い點があることを思ふて、以上申しのべた次第である。己上。

### 濁世動亂と親鸞聖人

■世界の動亂やら、我國の現状やら、宗教界の有様やら、何れの方面を見ても頗る不徹底な姑息的な氣分が充ち満ちてある。一言にして言へば如何にも末法濁世の有様が自然に發展されて行くかの如く見ゆる。

■斯く言へば頗る悲觀したる觀察のやうであるが併し茲に頗る力強き心強き感じをなすものは、獨り親鸞聖人の眞宗なるものが存在することである。抑も親鸞聖人が眞宗末代の明師と言はるゝ點がこれである。

■親鸞聖人の教は恰も不倒翁の如くである。大いなる動搖に出遇へば出遇ふ程、益々重力の中心に立ち返りて起上る教である。『經道滅盡ときいたり、如來出世の本意なる、弘願眞宗にあひぬれば、凡夫念じてさとのなり。』實に五濁惡世法滅百歳の教といふことが、畢竟世が末になる程輝く教であるといふことである。

■全體時機相應の要法といふことが是である。然るに現今の眞宗なるものが惡人正機ぢや、時機相應ぢやといふて、畢竟惡人のまゝでよい、肉食妻帯は時世に適

切である位な見解を以て、徒らに時勢に順應し、世間に妥協して游泳して、平氣な顔で居るは、時機相應の要法では無い。時機そのまゝの俗法である。惡人救済の教でなくして、惡人免許の邪法である。

■聊か言奇矯に涉るやうであるけれども、親鸞聖人の眞宗なるものは、決してそのやうな力の弱きものではない。全體末法に至る程彌陀の本願盛なりといふやうな確信ある、寧ろ大膽とも言ふ可き御言葉の現はるゝにはそれ丈けの確信が無くて言へるものか。外界に順應するが眞宗の特色では無い、寧ろこの濁惡動亂の裡に處しつゝ、優に之を救済し、之を攝受し得可き眞實なる徹底的の教である。

■像末五濁の世となりて、釋迦の遺教かくれしむ、彌陀の悲願ひろまりて、念佛往生さかんなり。『超世無上に攝取し、撰擇五劫思惟して、光明壽命の誓願を、大悲の本としたまへり』如何にも堂々たる大音宣布である。實に現今の如き濁惡動亂の時世に於ては、自から

清淨にすべし、眞實にすべしと教えた處で實際に行はれ無い教えてある。現今佛教各宗の形勢が徒らに、世間に同化することにのみ勉めて、自己の立場を破壊しつつあることを覺らぬ。自分では餘程開化した積りであるかも知れぬけれども、世間から見れば像末五濁の世となりて、釋迦の遺教かくれ玉ふ感を免れぬ。親鸞聖人も『正像の二時はをほりにき、如來の遺弟悲泣せよ』と言はれたのも是である。慷慨家としての親鸞聖人など、餘り感心した觀立ては無けれども、悲歎述懐談に自己の述懐と共に、當時の南都北嶺に對して、聊か洩らされたもこれである。嘗に教界のみならず當時の政界に對しても、短刀直入に喝破せられたる『教行信經』後序の法然聖人並に弟子の流罪に對する論斷の如きも、大經五惡段その儘の文句である。

■斯く言へばとて毫も親鸞聖人の眼中に當時の時世を相手にして、彼是れ一言も言はれぬ。各宗に對する態度とて、毫も是非善惡の論議には涉ら無い。五濁惡世はやはり五濁惡世である。勿論自分も五濁惡世の一人である、否な代表者である。他人は惡いが自分は善しといふやうなことは、聖人の口から一言も聞いたこと

とが無い。

■爾らば全體聖人の特色は何處に在る。唯この五濁惡世に於て、その五濁惡世を救はんが爲に現はれし彌陀の悲願を弘宣せらるゝ一點にあるのである。『五濁惡時惡世界、濁惡邪見の衆生には、彌陀の名號あたへてぞ、恒沙の諸佛すゝめたる』即ち濁惡邪見の我等を、飽く迄救ひ飽く迄惠さんとて光明無量壽命無量の大慈大悲の如來現はれ給ひて、眞心徹底の一念に、流轉迷妄の禍根を斷絶する眞宗教を宣傳し給ひたるが、弘願眞宗である。念佛成佛は眞宗である、本願他力眞宗である。眞無量も眞實教も眞中之眞も皆な之である。聖德太子の靈告に親鸞聖人を禮せられて、五濁惡時惡世界中、決定即得無上覺也とあるも畢竟聖人の眞宗の特色を讃仰せられたる言葉である。

■全體斯くの如く眞宗、否な宗旨の眞宗では無い、弘願眞宗、即ち如來の眞實宗の特色として、力説すべき處は、五濁惡世の不眞實を飽く迄救ふ處の眞實である。猶ほ詳しく言へば、如何なる濁惡不實の者と雖其の不實を斥けず、何處々々迄も大慈大悲の心を持ちて見捨て給はざるが故に。如何なる不實なる者も、終に頭が下る

一念を存せずして惡人正機を言ひ、時機相應を談ずるならば、恰もさしを結ばずして錢を繋ぎ、底なき袋に水を盛るが如くである。いつ迄経ちても満足喜悅の人生は實現せぬであらう。

■斯く言へばとて眞宗の教は現世に於て我等を佛たらしめ、この世を淨土たらしむるものではない。却つてこの救濟の一念あつてこそ如何なる五濁動亂の中に處して、如何なる虛假不實の我等も懺悔且感謝して起居動靜出来るのである。聖人の述懐にも『淨土眞宗に歸すれども、眞實の心はありがたし、虛假不實のわが身に於て、清淨の心もさらに無し』『外儀の姿は人ごとに、賢善精進現せしむ、貪瞋邪偽おほきゆえ、奸詐も、はし身にみたり』『惡性さらにやめがたし、心は蛇蝎のごとくなり。修善も雜毒なるゆゑに、虛假の行とぞ名けたる』『無慚無愧のこの身に於て、まことのこゝろはなけれども、彌陀の廻向の御名なれば、功德は十方にみちたまふ』『小慈小悲もなき身に於て、有情利益はあもふまじし、如來の願船いまさずば、苦海をいかでかわたるべき』『蛇蝎奸詐のこゝろにて、自力修善はかなふまじし、如來の廻向をたのまては、無慚無愧にてはとぞせん』實に反覆感泣すべき金言にして、眞宗未代の明師と渴仰雨涙を禁ずる能はざる次第である。

迄變はらざるものが徹底的の眞實である、即ち無限の眞實である、是が如來の眞實である。この眞實によりて五濁動亂の間に於て光明を認めらるゝのである。波亂多き人生に於て救濟の船を見出すのである。『無明長夜の燈炬なり、智眼くらしとかなしむな、生死大海の船筏なり、罪障重しとなげかざれ』

■猶ほ茲に大に注意すべき點は、眞宗の教は一面五濁動亂の間に處して、而も流轉輪廻の禍源を根絶するといふ點に在る。不斷煩惱得涅槃たると共に、即横超截五惡趣といふ點に存するのである。兎角不斷煩惱ぢやといふて放任主義に陥入りて設え煩惱ありと雖も横超斷四流の一念に生として受く可きの生なく、趣として到る可きの趣無きに到る動亂迷妄の禍源を根絶する彌陀の利劍の働きを忘れてはならぬ。若しこの迷ひの根を絶つ一念無りせば平和の源泉は無い。涅槃の常樂は來ら無い。宗教としての價値も無く、佛教としての目的を脱すことになる。親鸞聖人が『涅槃の眞因は唯信心を以てす』とか、『寂靜無爲の樂には必ず信心を以て能入とす』と言はれたがこの點である。實に眞宗の眞宗たる處は、この徹底的の一念に存するのである。若しこの

近角常觀著

# 信仰之餘瀝

第三十版  
定價卅五錢  
改訂稅四錢

右久しく品切れの處昨年中に出來致しました。

# 懺悔錄

第十版  
定價廿五錢  
改訂稅貳錢

# 信仰問題

第四版  
定價七十五錢  
改訂稅六錢

# 歎異鈔

第七版  
定價五錢  
改訂稅三錢

# 信仰之余瀝要略

第四版  
定價五錢  
改訂稅三錢

この要略は「信仰之余瀝」中の主要なる數篇を選び、  
施本用としてこしらへました。「歎異鈔」と共に、御  
求めの部數に應じ割引を致します。

東京市本郷區森川町一  
振替口座東京一六六九六番  
**求道發行所**

求道第拾四卷第貳號 大正七年三月八日第三種郵便物認可  
大正七年四月十五日發行(毎月一週十五日發行)

講

話

每日曜午前九時 每月十五日午前九時慶信會  
每土曜午後六時 每月廿八日午後七時聖會

求道會館  
〔本郷區森川町一番地〕

每土曜午後二時

第二 求道會  
〔九段坂佛敎俱樂部〕

每月二十七日午後七時

第三 求道會  
〔日本橋區芝町講敎所〕

每日曜午前八時

日曜學校  
〔求道會館〕

●本誌は毎月一回十五日發行とす●誌代は總て前金御拂込分のこ  
と●送金は成るべく振替によられたし●郵便爲替の場合には振替  
局は本郷區森川町局宛のこと●郵券代用は一割増●宛名人は凡て  
求道發行所のこと

定價一部十四錢 六ヶ月分 八十錢 郵税不要  
三ヶ月分 壹圓五十錢

大正七年四月十二日印刷  
大正七年四月十五日發行

發行所  
編輯人 近角常觀  
印刷人 近角常觀  
東京市本郷區森川町一番地  
**求道發行所**  
電話(小石川一六四一番)振替(東京一六六九六番)